



現代インド・フォーラム



Contemporary India Forum Quarterly Review

2017年 春季号 No. 33

特集: インドの宗教と社会

インド映画が映しだす現代インドの社会と宗教
—最近のトレンドを中心に—

Inidan Society and Religion in the Post-reform Period
as Reflected in Contemporary Entertainment Films

山下 博司 (東北大学大学院 国際文化研究科 教授)

現代パールシーのゾロアスター教信仰

Zoroastrianism of Present Parsis in India

香月 法子 (中央大学政策文化総合研究所 準研究員)

インドのキリスト教

—カトリック教会の社会福祉事業にも触れて—

Christianity in India with Special Reference

to Social Welfare Project in the Catholic Church

岡光 信子 (東北大学講師、中央大学政策文化研究所 客員研究員)

インドの図書館事情 —宗教書籍を中心に—

Libraries in India with Special Reference

to the Collection of Religious Publications

吉植 庄栄 (東北大学附属図書館 情報サービス課 参考調査係長)



公益財団法人 日印協会

THE JAPAN-INDIA ASSOCIATION

電子版

<http://www.japan-india.com/>

- ※ 本誌掲載の論文・記事の著作権は、公益財団法人日印協会が所有します。
- ※ 無断転載は禁止します。(引用の際は、必ず出所を明記してください)
- ※ 人名・地名等の固有名詞は、原則として現地の発音で表記しています。
- ※ 政党名等の日本語訳は、筆者が使用しているものをそのまま掲載しています。
- ※ 各論文は、執筆者個人の見解であり、文責は執筆者にあります。
- ※ ご意見・ご感想等は、公益財団法人日印協会宛にメールでお送りください。

E-mail: partner@japan-india.com

件名「現代インド・フォーラムについて」と、明記願います。

現代インド・フォーラム 第33号 2017年 春季号

発行人兼編集人 平林 博

編集協力 現代インド研究センター

発行所 公益財団法人日印協会

〒103-0025

東京都中央区日本橋茅場町 2-1-14

TEL: 03(5640)7604 FAX: 03(5640)1576

インド映画が映し出す現代インドの社会と宗教
— 最近のトレンドを中心に —
Indian Society and Religion in the Post-Reform Period
as Reflected in Contemporary Entertainment Films

東北大学大学院 国際文化研究科 教授
山下博司

はじめに

十年一日のように見えたインドの娯楽映画の世界にも、変化の波が押し寄せている。「変化」は作品のコンテンツだけに限らず、映画ビジネスそのものの地殻変動をも誘発するものになっている。これら映画業界の抜本的变化の導因となっているのは中間層の充実と国外マーケットの拡大である。本稿では、インドの娯楽産業にインパクトを及ぼしつつある社会変化の現実について、新中間層の台頭と在外インド人のプレゼンスの問題に光を当てて考えてみたい。

I. インド映画と在外インド人

1. 在外インド人のイメージの好転 —開放経済導入以降の価値観の移ろい—

在外インド人¹は、インド人の文化的規範や生活意識から逸脱した存在として、一般のインド人から負のイメージをともなって捉えられがちであった。彼らのイメージが反転する契機となったのが、20世紀末から同時並行的に起こってくるグローバリズムの進展、情報産業の世界的活況、インド経済の新自由主義的転換、およびインドの高度人材の活発な国外進出である。

1991年、イラクのクウェート侵攻を契機とする原油価格の高騰と中東等への海外出稼ぎ者からの送金の減少などが災いしてインド政府が保有する外貨準備が枯渇し、デフォルト寸前にまで追い込まれた。当時のナラシンハ・ラーオ首相とマンモーハン・スィン財務相は、国際収支の危機的状況を立て直すため、市場原理と競争重視の原則を採り入れた「新経済政策」を実施し、本格的な経済自由化路線に舵を切ったのである。インド経済の好転と世界経済のグローバル化は、外国資本のインド進出やインドへの投資を促進したが、一方でインド人の海外進出を活発化させ、ITや経営学などを修めた高度人材のインドからの流出（新移民）が増えていく。いまやインドは世界最大の移民送出国となっている。

こうして海外に新ディアスポラが形成される一方、旧来の移民社会でも新移民の増加にともなう質的变化が顕在化していく。彼らの中にはインド国籍を保持したまま国外を活動拠点とする者（NRI: Non-Resident Indians）も少なくない。インド政府は2004年に海外在住インド人省（2016年に外務省と統合）を設置し、在外インド人への情報提供や本国への投資促進などに乗り出した。インド国内にあっては、国威の高揚感もあってヒンドゥー・ナショナリズムが活性化するとともに、所得水準が向上し、人々の消費行動や生活様式にも変化の波が到来するのである。

一連の経過の中で、在外インド人は旧来のイメージから脱却し、インド人一般のまなざしも、世界とインドとを架橋する存在として好意的なものに変わっていく。在外インド人は、資本主義と消費文化の尖兵でありながら、海外にあってはインド的アイデンティティを保ち、「インド人らしさ」を体現する人々と評価され、インド人としての誇りをくすぐる存在に映るようになったのである²。

こうした状況をうけ、インドの娯楽映画の世界も変化の予兆を示しはじめる。中小規模の映画館が次々に閉館し、代わってマルチプレックス（シネコン）が映画興行の中心的な位置に躍り出てくる。コンテンツについて言えば、1990年代半ば頃を境に、作品に登場する在外インド人は従来のステレオタイプのマイナスイメージを払拭し、観客が自己のアイデンティティを託し得る存在への移行が起こってくる。在外インド人（特にNRI）は、映画の中で脇役や端役から転じて主役の座を射止めるだけでなく、彼らを題材とする作品の数も1990年代以降増加の一途をたどることになる。

在外インド人をめぐるイメージの反転は、この間のインド人一般の価値観の推移と無縁でない。世界価値観調査（WVS）によると、1996年と2015年を比較して、インドの中間層の間で伝統志向や社会志向も健在ではあるものの、ここ20年ほどで相対的に衰え、伝統志向から合理志向へ、社会志向から個人志向へと、指標が先進的な方向へと様変わりを見せている³。対極的な志向が併存・混在する中での価値体系の漸次の移行が、インド人のNRI観や映画をめぐる消費行動にも影を落としていることは疑いない。

2. NRI 映画の変遷 — 『カル・ホー・ナー・ホー』（2003年）から『アエ・ディル・ハエ・ムシュキル』（2016年）へ —

(1) NRI 映画『カル・ホー・ナー・ホー』の成功

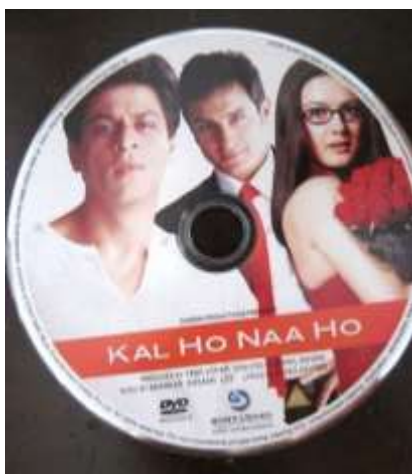
在外インド人を扱い大きな成功を収めた初期の作品に『カル・ホー・ナー・ホー』

(邦題『たとえ明日が来なくても』。2003年、ヒンディー語、188分)がある。ニューヨークに住むインド系住民の悲喜交々を描いた作品で、オール海外ロケ作品の先駆けとしても記念碑的作品となった。あらすじは以下の通りである。

MBA コースに在学する女性ナイナー (プリーティ・ズインター) は、家庭内トラブルで疲弊していたが、天真爛漫な級友ローヒット (サイーフ・アリー・カーン) に心慰められていた。ナイナーは、近所に越してきたアマン (シャルク・カーン) の物怖じしない人柄に惹かれていく。アマンの心にもナイナーへの愛が芽生える。しかし不治の病に冒されていたアマンは、ナイナーを愛するがゆえに、彼女とローヒットの間のキューピッド役に徹する。2人の結婚を見届け、アマンは息を引き取る。

『カル・ホー・ナー・ホー』は、やはり 2003 年に公開されたボリウッド映画 (=ムンバイを拠点に制作される娯楽映画全体の俗称) の中で最高の国外収益をあげた。総収益 1300 万米ドルの内訳は、国内市場が約 68%、国外市場が約 32%となっている。制作費は 420 万ドルであった。同作品は、2003 年時点での国外収益記録を塗り替えるものとなった。国内でも大成功を収め、2003 年の国内興行成績で第 2 位を記録している。国外に居住する登場人物たちの設定が観客に好意的に迎えられたのである。

『カル・ホー・ナー・ホー』は、スターの共演、派手な歌と踊りの場面、三角関係、大富豪や大邸宅の登場、家族関係、笑い、哀切といった、インドの商業映画に定番の要素をふんだんに盛り込んでいる。詰まるところ本作品は、北米で物語が展開することを除き、インドを舞台とする旧来の娯楽映画と構造的に大差ないものとなっているのである。



< 写真 1 『カル・ホー・ナー・ホー』 DVD (筆者撮影) >



< 写真 2 『アエ・ディル・ハエ・ムシュキル』のポスター (インドネシア・スラバヤ市のシネコンにて 筆者撮影) >

(2) 最新の NRI 映画『アエ・ディル・ハエ・ムシュキル』の人間模様

在外インド人を主人公とする最近作に『アエ・ディル・ハエ・ムシュキル』（「複雑な心」の意。2016年、ヒンディー語、157分）がある。秋の大祭・ディワリーの時期に合わせ、昨年10月28日に世界同時に封切られた。『カル・ホー・ナー・ホー』から13年を跨いで、前作と同じ制作会社、同じ脚本家、同じ撮影監督が担当しており、この間の推移と異同を検証するには絶好の対照事例でもある。本作品の梗概は次の通りである⁴。

ロンドンでMBAを学ぶアヤーン（ランビール・カプール）は、ディスコでアリゼー（アヌシュカー・シャルマー）と知り合い惹かれるようになる。しかし2人にはすでに恋人がいたことから、両者の関係はぎくしゃくしたものになる。やがて各々が恋人の浮気現場を目撃してしまい、両者は恋人との仲を清算する。こうして2人はさらに親密になっていくが、アリゼーを慕うアヤーンは、友人関係の延長としか捉えていないアリゼーをもどかしく思うのだった。

連れだってパリとアルプスに旅行した折、アリゼーは昔の恋人アリー（ファワード・カーン）と偶然の再会を果たす。アリゼーは復縁を迫られ動揺するが、遂にアリーとの結婚に同意する。アリゼーは結婚式のためインドに赴く。彼女はインドのラクナウーからアヤーンに電話し婚礼に招待する。彼は複雑な気持ちで参列するが、ロンドンへの帰路、フランクフルトで離婚歴のある女流詩人サバー（アイシュワリヤー・ラーイ）と出会う。前夫とも良好な関係を保っていたサバーだったが、アヤーンに心惹かれウィーンで一緒に暮らし始める。それでもアヤーンはアリゼーを忘れられずにいた。やがてアヤーンは、アリーとアリゼーとが夫婦別れしたことを知る。アリゼーへの愛が再燃するが、その時アリゼーは不治の病に冒されていた。

制作費は1500万ドルであったが、音楽や放送権料の売却などを通じ、公開前に1120万ドルをすでに回収している。封切後のインド国内オープニング・ウィークエンドの興収が530万ドル、インド国外のそれが1360万ドルであった⁵。最終的な収益額は未確認だが、公開直後の興収の差などから推して、国外での収益が国内のそれを数倍上回ったであろうことは想像に難くない。本作品は興行記録をいくつも塗り替え、公開から3か月を経た2017年1月現在、全世界で5000万ドル近い収益を上げている。これらの数値から、『カル・ホー・ナー・ホー』から13年を経た現在、制作費、収入規模ともに大きく上昇していることや、作品によっては収益が国内と国外で逆転し

ている様子が窺われるのである。

3. 両作品の比較から垣間見えるもの

13年の間隙はあっても、両作はメロドラマ的フレームワークを踏襲し、外国でMBAを学ぶ主人公、「不治の病」という道具立て、ほぼ外国のみの設定と撮影で完結している点で軌を一にしている。『アエ・ディル・ハエ・ムシュキル』は祝祭シーズンの連休を当て込んだ作品ということもあり、歌や踊りのシーンにも事欠かず、全体にインド的メロドラマの枠組みに準拠して作られている。しかし一方で、上映時間の短さ⁶、筋立ての複雑化、ロンドン→パリ→アルプス→ラクナウ→フランクフルト→ウィーンとめまぐるしく移行する背景設定、大富豪・大邸宅の不在、自然な脈絡での歌と踊りの挿入など、前作と相違する要素も数多く見出される。特筆されるのは、ともに西欧生まれとされる主人公2人が、インド国籍を保有していることに誇りと自負を抱いていることが台詞中で表明されている点である。さらに、家族との絆やしらが主題の外に退いていること、不倫や二股愛を含む奔放な男女関係が肯定的に描かれていることも注目される。キスシーンも効果的に盛り込まれている。

処女性や貞操をめぐるインドの伝統的観念の揺らぎが画面上に顕示されていることについては、インド人の新旧の価値の相克が投影されているとも言えようし、外国映画の影響や西欧の価値観の浸透を見てとることもできよう。外国に生まれたインド系の若者たちの意識や感性を代弁していると解することも不可能でない。

インド系移民は世界に2500～3000万人いると言われる。国外でインド映画を受容する主体がこれらの人々である。1人当たりの興行収益単価はインドに比べ海外のほうが格段に高く、在外インド人の存在はインド映画の入場料収入にとってひととき重要な存在に躍り出ている。一方、映画作品から得られる収益の内訳もかつてとは大きく様変わりし、ボックスオフィス収入に比べDVDや動画配信による収入が重要度を増している。消費や受容の形態が映画館からパソコンやプレーヤーでの再生へと転換しているからである。インド人の世界進出によりマーケットも一層グローバル化し、オーディエンスも構造変化を来している。業界の収入の大きな部分が海外に依存するようになり、それにともない作品の質や内容にも変化の波が及んでいる。このように、インド映画産業全般において在外インド人のプレゼンスは重みを増しており、彼らの嗜好や生活感がフィルムメイキングに反映されても不思議ではないのである。

Ⅱ. 新中間層の成立とオーディエンスの質的変容

1. 社会派娯楽作品『ターレー・ザミン・パール』（2007年）の衝撃

インド映画のコンテンツは、インド社会のありようと連動している。経済開放以降ほぼ順調な経済成長が続き、世帯年間可処分所得 5,000～35,000 ドルに当たる人々を「中間層」と仮に定義すると、2000年に14%、2008年に18%、2010年に20%、2015年に25%強と着実に拡大している。経済自由化の恩恵をうけて成立してきた中間層は、従来からの中間層と区別して「新中間層」とも呼ばれる。

中間層の充実は高等教育を受けた層の増大と表裏一体である。映画産業も、マス・オーディエンス（＝高等教育を受けておらず、社会・経済的に中間層よりも下位に属する多数の観客）向けの映画作りから、しだいにクラス・オーディエンス（＝高等教育に浴し、社会・経済的にも中間層以上の観客）を意識した制作・興行のスタイルへと重点をシフトする傾向を見せるようになってきている。以下、クラス・オーディエンスの増加や観客の嗜好の変化が要因となって想定外の成功を収めた作品『ターレー・ザミン・パール』（「地上の星たち」の意。ヒンディー語、2007年）を例に考えてみたい。

本作品は、人気俳優アーミル・カーンが制作・監督・主演した意欲作である。主人公は、学校でも家庭でも手を焼かされていた少年イシャーン。難^{ディスレクシア}読^症という障害があったが、それに気づかない両親によって問題児扱いされ、遠方の寄宿舎学校に入れられてしまう。彼はその学校で、同じ障害を克服した経験をもつ若い美術教師（アーミル・カーン）と出会い、絵の才能を開花させていく。

『ターレー・ザミン・パール』では、スター俳優が1人のみで、娯楽映画につきもののオーバーアクション、唐突な出来事、不自然な展開などもない。挿入歌にはストーリーに適った歌^{リリック}詞が付けられ、唯一のダンス・シーケンスも全体の文脈から遊離しないよう配慮が凝らされている。予算規模も小さい。すなわち、従来の娯楽映画とは多分に趣を異にしているのである。にもかかわらず本作品は、海外のオーディエンスをターゲットにするのではなく、第一義的に国内マーケットを念頭に制作されたものである。スターが登場し、シーンを効果的に演出する背景音楽が配されるなど、商業映画としての要件を満たしていることが何よりの証しである。

『ターレー・ザミン・パール』は、明確な社会的メッセージがこめられた娯楽映画

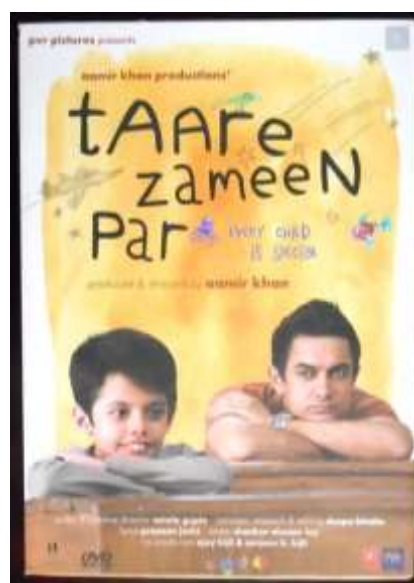
である。メッセージ性が突出していたものの、国内で商業的に成功し批評家からも総じて好評であった。南インドのタミル語やテルグ語にも吹き替えられた。本作品は教育界など国内の各方面に反響を呼び起こし、一種の「社会現象」になったのである。

この作品は、すぐれたストーリー、良質な挿入歌、適切なキャスティングという、ヒット作に求められる諸条件をクリアーし、マス・オーディエンスとクラス・オーディエンスの双方に好感をもって迎えられる作品となった。その成功は、所得水準や教育水準の高まりをうけて観客の質が多様化し、従来型のメインストリーム映画とは一味違う作品を期待する層が着実に形成されつつあることを証明したのである⁷。この作品による収益の約9割が海外からもたらされたことも注目される。国外配給権を取得しDVD販売も手がけたディズニー・プロダクションの貢献が大きい。それだけNRIを含む海外のインド映画ファンからの反響も大きかったことになる⁸。

アーミル・カーンは、本作が国内外で高い評価を得たのを機に、インド農民が直面する借金漬けの苦難を皮肉をこめて描いた社会派作品『ピープリー・ライヴ』（「ピープリー村からのライブ中継」の意。ヒンディー語、2010年）を制作した。プロデューサーとしてテレビ番組に軒並みゲスト出演して宣伝に奔走したが、多くの賞を得たものの過度の社会諷刺が災いしてかヒットを逃し、海外配給権の売却などで辛くも制作資金を回収し赤字を免れたという。娯楽性とメッセージ性の絶妙なバランスという、商業映画が担う宿命を今さらながら思い知らされた事例でもあった。



<写真3 アーミル・カーン
(チェンナイの南インド映画商業
会議所附属シアターでの対話集会
にて筆者撮影)>



<写真4 『ターレー・ザミン・パ
ル』のDVDジャケット(筆者撮影)>

2. 「新中間層シネマ」の産声

—『ランチボックス』（2013年）が開示する世界—

2000年代前半まで、ヒンディー映画の世界では、単純で硬直化した映画作りが横行し、筋立てや挿入歌も以前のヒット作の焼き直しすら珍しくなかった。しかしインド映画、とりわけヒンディー語のそれの中には、歌と踊りのシーンが入った娯楽映画のフォーマットを採りつつもインドの社会問題に目を向けた諸作品があり、大衆から一定の支持を得ていたことも事実である。ただし、1970年代と1990年代に制作された社会的テーマを扱った諸作品を比較すると、社会問題への向き合い方に大きな違いがあることがわかる。1990年代半ばを境に、社会に対して従来とは異なるスタンスの作品が制作されるようになったのである。

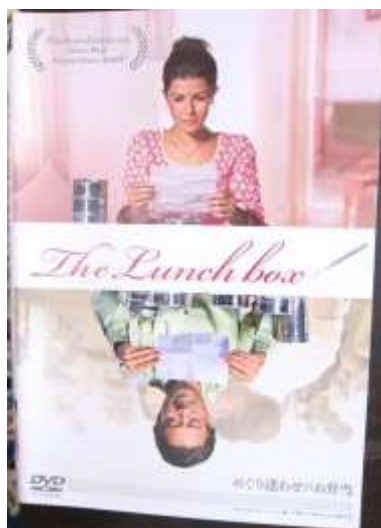
特に中間層の拡大という事態をうけて、最近のボリウッド映画には、都市部の新中間層を題材にし、彼らの意識や感性に直接訴える趣向の作品群が登場している。それを「新中間層シネマ」と名づけよう。これがインド映画内部に生じつつある新しい潮流の本態である。経済自由化以降台頭してきた中間層の意識と世界観の表出の場としての新ジャンルが出現したのである。

2014年に日本で公開され話題を呼んだ『ランチボックス』（邦題『めぐり逢わせのお弁当』。2013年、ヒンディー語）は、この類型に連なる好例である。インドという舞台設定なしに成り立ち得ない作品ではあるが、国や民族を超えて誰もが経験する孤独や男女関係の機微を扱っており、まさしく新中間層シネマの典型的な一例である。

この種の作品群を捉えて、「社会的問題意識の不在」ないし「社会へのコミットメントの欠如」と評する向きがある。たしかに、それ以前の映画が貧困を題材にし、抑圧された者の視点から既 ^{エスタブリッシュメント} 存 体 制を糾弾するものが多かったのに対し、「新中間層シネマ」は消費文化を肯定・讃美し、社会の底辺や周縁で苦悶する民衆への共感を欠いた非社会的なジャンルに見えなくもない。しかし、これらの作品は現実には背を向けているわけでは決してない。社会についての新しい主題を提示していると見るべきである。従来の硬直的な二項対立の構図から距離を置いた、人間が共有しより共感し得る価値への覚醒が芽生えているからである。このジャンルの成立は、インド映画を地域性や民族性の呪縛から解放し「エスニックシネマ」からの脱皮・脱却を促す触媒となり得る可能性を秘めている。

コンテンツ的には、「新中間層シネマ」は、インド娯楽映画の強固なフォーマット

を突き崩す挑戦性を持ち、より普遍的な映画文法・映画世界を指向している。一方、インドというセッティングの個別性・地域性のディテールはむしろ強調しつつ、個々の人間が共通に有する感性や理性に訴えかけようとしていることも、インド映画の新しいトレンドとして注目される。「新中間層シネマ」の出現に象徴される新局面は、インド映画についての既成の知識や方法を動員するだけでは論じ切れない側面をもっているのである。



< 写真 5 『ランチボックス』の DVD ジャケット (筆者撮影) >



< 写真 6 『PK』の DVD ジャケット (筆者撮影) >

Ⅲ. インド映画と「宗教」―タブー視から客観視の対象へ―

1. 映画『PK』(2014年)の宗教批判

アーミル・カーン主演の社会派コメディ『PK』(2014年、ヒンディー語)をもとに、中間層の充実など上述の社会現象と関連させて、インド娯楽映画と宗教にまつわる話題に触れて稿を閉じたい。

本作品では、異星から地球探査というミッションを負ってやって来た宇宙人 PK (アーミル・カーン) をめぐる顛末が描かれる。彼は地球到着直後に「リモート」と呼ばれる小型通信装置を盗まれ、自分の星との連絡が途切れて戻れなくなってしまう。彼がリモートを奪回し、無事帰還を果たすまで珍騒動が繰り広げられる。故郷に帰りた一心で地球人と奇妙な交流を重ねていく姿を通じて、人間社会が抱える不条理が浮き彫りにされていく。ブラックジョークを借りた諷刺や皮肉が随所に散りばめられ、特にカリスマを頂くカルト的宗教や偶像崇拜的な宗教実践に対して批判のまなざしが向けられる。

これまで「宗教」は、インドの娯楽映画にとって微妙かつ扱いにくいテーマで、「タブー」とでも言うべきものであった。その背景には、インド独立以前に遡るヒンドゥー教徒とイスラーム教徒の間の確執がある。検閲制度は、植民地期以来、宗教対立を含む社会不安の原因になり得るような要素に注意深く目を光らせてきた。

映画についても同様である⁹。タミル語映画『ボンベイ』（1998年）は、ラーマジャンマブーミ¹⁰の生誕地とされるウツタル・プラデーシュ州アヨーディヤーでの両宗教の衝突に端を発したボンベイ暴動（1992～93年）を扱い、設定や表現をめぐって政治的介入を許すとともに、検閲委員会によって容赦なく削除や撮り直しが命じられた。大幅な遅延を余儀なくされた上に、映像・台詞とも満身創痍で封切りを迎えた経緯がある¹⁰。同作はセンセーションを巻き起こし国内でヒットを記録したが、東南アジアの数カ国で上映禁止になるなど、大きな波紋を呼んだ。「宗教」は、扱い次第で映画の興行にとって致命的なリスクを招き入れることにもなるのである。

『PK』も例外ではない。現にいくつかのシーンが、ヒンドゥー至上主義団体・世界ヒンドゥー協会（VHP）によってヒンドゥー教を冒瀆するものとして糾弾され、劇場の中には破壊行為の標的となったところもある。その一方、ヒンドゥー系の有力政治家が鑑賞をむしろ勧めた事例もある¹¹。最新の研究によれば、本作品に対しては、現実においてもウェブ上でも賛否こもごもで、作品内容を支持する集団と拒絶する集団とに分かれて対立しているという¹²。一方で本作品は、世界 22 カ国でリリースされるや興行記録の多くを塗り替え、インド映画史上一二を争うメガヒットとなったのである¹³。

2. 「宗教」をめぐる意識の二極分化と新旧価値観の相克

この現象をどう解釈すべきであろうか。ここにも台頭する新中間層の影を見とることができるように思われる。筆者が 2010 年頃にチェンナイで面接取材した有名書肆の経営者（ガーンディ・カンナダーサン氏）によれば、このところの教育の普及によって批判精神や合理精神が民衆に浸透するようになり、進歩的な考え方ができる人々が増えているという。先に言及したように、「合理志向」が近年の中間層に顕著になっているが、「合理志向」とは、言うまでもなく伝統や宗教的な基準に拠るのではなく、それらをも客観視するような「道理」や「合理」が第一義的な判断原理として働くような精神的方向性である。映画『PK』の受容に見られる「宗教」への両義的な心理、ないし作品の是非をめぐる態度の分極化は、現代インドで勢力をもたげつつある合理主義的な思考様式と昔ながらの伝統的価値体系という、併存する新旧両様の

力のせめぎ合いの現実を投影しているように思われる¹⁴。

(2017年4月3日)

1 本稿では、インド国籍の有無を問わず、国外に居住するインド系の者を「在外インド人」と呼ぶ。国籍を保持している者にことさら言及する場合は「NRI (Non-Resident Indians)」の呼称を用いる。

2 Ingrid Therwath, "Shining Indians': Diaspora and Exemplarity in Bollywood", *The South Asia Multidisciplinary Academic Journal*, vol.4, 2010.

Cf. <https://samaj.revues.org/3000> (2017年3月7日閲覧)

3 磯崎彦次郎・佐々木大・Ishan Pandit「変わりゆくインド中間層の実態」『知的財産創造』野村総合研究所、2016年7月号、p.72。

4 両作品の間にも同プロダクションが海外ロケを駆使して制作した作品は複数あるが、煩雑を避けるため比較からは除外する。

5 ちなみに、同時期に日本で公開された長編アニメーション映画『君の名は。』のオープニング3日間の興収は1200万ドルである。

6 長大なインド娯楽映画の上映時間が短縮傾向にあるのは、マルチプレックスで1スクリーン当たりの上映本数を多く確保する必要性と関連している。

https://www.kpmg.de/docs/FICCI_hitting_the_notes.pdf p.57 (2017/3/18 閲覧)。
また、旅客機の機内エンタテインメントの市場向けに、2時間前後の短縮バージョンへと加工し易くするためもある。

7 山下博司・岡光信子『アジアのハリウッド—グローバル化とインド映画—』東京堂出版、2010年、pp.217-226 ; Hiroshi Yamashita & Nobuko Okamitsu, "Transitional Phases of Indian Cinema under Globalization with Special Reference to the Emergence of the Overseas Market" 『東方』第28号、2014年、pp.147-165。
インド映画については、山下博司・岡光信子「インド映画の歩みと現状」『新版 インドを知る事典』東京堂出版、2016年、pp.308-337 も参照。

8 岡光信子「インドの良心 アーミル・カーン」『たいまつ通信』2013年9月10日号、同「映画人・アーミル・カーンの挑戦」『たいまつ通信』2013年11月10日号。

9 インド映画における検閲については、山下博司・岡光信子『アジアのハリウッド』東京堂出版、2010年、pp.170-173 を参照。

10 山下博司「『ボンベイ』におけるイスラムの描写について」『イスラムの映画、映画のイスラム—緊急特集— (アジア映画講座 10)』国際交流基金アジアセンター、2002年、pp.12-18。

11 "Aamir Khan's 'PK' Tax-free in Uttar Pradesh", *The Economic Times*, 31 December 2014.

12 Monisa Qadri & Sabeha Mufti, "Films and Religion: An Analysis of Aamir Khan's PK", *Journal of Religion & Film*, Volume 20, Issue 1

<http://digitalcommons.unomaha.edu/cgi/viewcontent.cgi?article=1361&context=jrf>
(2017/3/13 閲覧)

13 岡光信子「アーミル・カーン最新作品『PK』」『たいまつ通信』2015年3月10日号。

14 インドにおける映画と社会、特に政治との関わりについては、南インド・タミルナードゥ州に好例がある。山下博司「政治と映画—MGRの軌跡—」、坂田・内藤・高橋編『都市の顔・インドの旅』春秋社、1991年、pp.165-169; 山下博司「DMK映画—タミル・ナショナリズム—」、『インド文化事典』丸善出版、2017年（印刷中）を参照。

執筆者紹介 山下 博司 (やました ひろし)

マドラス大学ラーダークリシュナン哲学高等研究所博士課程修了、Ph.D。名古屋大学大学院国際開発研究科国際コミュニケーション専攻助教授などを経て、現在東北大学大学院国際文化研究科教授、国立民族学博物館共同研究員。国立シンガポール大学社会学科客員研究員などを歴任。専門はインド思想・文化、インド映画、移民研究。単著に『ヒンドゥー教—インドという謎—』『ヨーガの思想』（ともに選書メチエ）、『古代インドの思想』（ちくま新書）、『インド人の「力」』（講談社新書）など多数。



現代パールシーのゾロアスター教信仰 Zoroastrianism of Present Parsis in India

中央大学政策文化総合研究所準研究員
香月法子

はじめに

ビジネスでインド、特にムンバイ（旧ボンベイ）を訪れた方なら、パールシーと呼ばれる人に会ったことがあるかもしれない。パールシーとは10世紀頃にイランからインドへ移住して来たゾロアスター教徒を先祖に持つ人々で、現在でもゾロアスター教の信仰を守っている。パールシーとは我々がペルシア人というのと同じ意味である。インドにおけるその人口は多いときでも15万人程度で、現在では6万人に満たない。そのほとんどがムンバイに住んでいる。自ら実利主義者ともいっており、ビジネス・コミュニティと取られることもあるほど、会社経営者も多く、弁護士、医師、研究者など高学歴、高収入な人々も多い。また今でもイラン人の風貌を残していたり、英語だけでなく数カ国語を話す人も珍しくない。服装だけでなく生活スタイル全般が欧米化しており、全体的に豊かな生活を送っている。



＜写真1 ムンバイのゾロアスター教寺院（筆者撮影）＞

パールシーは慈善家でも知られている。ムンバイの歴史を紐解けば、多くのパールシーがムンバイの発展に寄与したことがわかる。それゆえ「チャリティ、その名はパールシー」¹とまで言われた時代もあった。自らのコミュニティへの慈善事業はそれ以上である。パールシーの多くが彼らのための団地に住んでいるが、これらはパールシー慈善家個人が土地を安価に貸し出し、建物もインド最大の財閥タタ・グループやゴドレージといった、パールシー出自の財閥が格安で建設したものである。ここは相場よりずっと安価な賃料で、広く、環境が整えられている。他にも宗教施設建設そして維持、病院や学校、学生寮の運営、医療費や教育費、生活支援などなど、このコミュニティは慈善事業で溢れており、彼らの生活の底上げとなっている。

このように世俗的な側面は見えて来ても、宗教的な事柄はなかなか見えてこないのも

パールシーの特徴である。ゆえにここではパールシーの信仰するゾロアスター教とはどのような宗教なのか、また彼らが日常において、どのようにその信仰を守っているのか、そしてその中でどのような問題に直面しているかを取り上げ、古代から続く宗教の現代のあり様の一端を明らかにしたい。

1. ゾロアスター教の歴史と教義

1. 先行するイメージ

ゾロアスター教については、なかなか触れる機会がないのではないだろうか。例えばマツダ自動車の綴り MAZDA の由来が、ゾロアスター教の最高神で智恵主といった意味のアフラ・マズダー (Ahura Mazda) であることや、イギリスのロックバンドであったクィーンのボーカリスト、フレディー・マーキュリーがゾロアスター教徒であったといったことで、知った方もいるだろう。タタ・グループの創始者一族もそうである。最近では少年漫画 (例えば『マギ』) や、ゲーム (例えばサモンズボード) などに出てくるキャラクターの名前などにも、ゾロアスター教の教えや神霊が使われることがあるようだ。加えて鳥葬という独特の葬法をしていることもあり、ゾロアスター教とは俗にいう拝火教のことで、古代から続くオカルト的な宗教といったイメージを持たれやすい。

ところが巷に溢れるゾロアスター教に関する情報には、時に大きな間違いが見られる。特にゾロアスター教を拝火教と、今でも表記していることがそうである。インドでもイランでも、ゾロアスター教徒たちは拝火教あるいは拝火教徒という言葉嫌っている。これは周辺社会が、彼らを軽蔑して呼んだ言葉だからである。こういった外部からのイメージが時に彼らに不快を与えていることは、あまり気づかれていない。鳥葬についても、鳥に喰わせるといったイメージばかりが先行し、正しい情報は伝わっていない。ではゾロアスター教とはどのような宗教か、現在、どのように信仰されているのか、ごく簡単に紹介したい。

2. 歴史

ゾロアスター教は、諸説あるものの、紀元前 1000 年前後の時期に実在したとされるゾロアスターによって、東イランで興った教えが始まりとされる。ゾロアスターとはザラスシュトラ (アヴェスタ語) のギリシャ語読みである。ゾロアスターは誕生に際し、笑って出て来たとされている。なぜなら世界の終わりには善神アフラ・マズダーが勝利し、悪がこの世から一掃されることを知っていたためであるという。30 才で神の啓示を受け、しばらくは理解者を得られなかったが、悪の誘惑などに打ち勝ち、最終的にカウイ王朝ヴィスタースパ王の庇護を得ることができた。こうして彼の教えは国中に広まった。ゾロアスターは最後に、外敵に侵略されたゾロアスター教寺院を守って、77 才

で殉教したとされている。

アケメネス朝ペルシア（紀元前 550 年～紀元前 330 年）の国教が、ゾロアスターの始めたゾロアスター教だったのかどうかは定かではない。ゾロアスター自身、父親が聖職者であったといわれているので、すでに何らかの宗教があった中に生まれたわけである。このためゾロアスター以前からあったとされる宗教をマズダ教とし、ゾロアスターをマズダ教の中で改革をした人物とする説もある。アケメネス朝はアレクサンダーの侵攻によって、紀元前 330 年に滅亡し、ゾロアスター教も国教の座を追われたとされる。

ササン朝ペルシア（紀元後 224 年～650 年）においてゾロアスター教は国教とされ、神学的にも大きく発展した。しかしローマとの領土争いに破れたり、王位を巡る争いで国内が混乱したり、国力が衰える中、アラブ人の襲撃によって 650 年に滅亡した。このとき山岳地帯に逃れたゾロアスター教徒の一派が、のちにインドへ渡ったとパールシーは考えている。

3. 教義

ゾロアスター教の聖典は『アヴェスタ』と呼ばれる。度重なる戦火の中、多くが散逸し、現存するのは4分の1とされる。ゾロアスター自身が説いたとされる箇所は、そのうちの一部である。また現在、手にすることができる『アヴェスタ』が文字化されたのは紀元後3世紀頃であり、それまでは口承で伝えられて来たとされている。これらはキリスト教の聖書のような精神的拠り所や、イスラーム教のシャリーアのような法的役割は担っておらず、もっぱら儀礼や日常の祈禱句として使われるのみである。

ゾロアスター教の教義といえば、その特徴は二元論である。ゾロアスター自身の言葉の中にも、二元論の原型が見られる。この世は善神アフラ・マズダーとアンラ・マンユ（敵対者なる霊）と呼ばれる悪神の戦場であるとされており、このことがゾロアスター教は善悪二元論と言われる所以である。従って教徒の最大の義務は、アフラ・マズダーの教えに法って、悪と戦うこととなる。この時、善と悪のどちらを選ぶかという選択を決定する自由意思が人間には与えられている。このように人間は盲目的に神に従う者ではなく、神の協力者とされる。この自由意志の神の意に適う方向性を表現する言葉が、フマタ・フクタ・フヴァルシュタ（善思・善語・善行）である。パールシーにゾロアスター教の教義について問えば二元論よりもまず、この三語を挙げるだろう。

Ⅱ. パールシーの歴史と信仰形態の現状

1. パールシー史

ササン朝滅亡後、しばらくはイランに留まっていたゾロアスター教徒の一群が、10世紀頃よりインド西岸へ信教の自由を求めて移住してきた。そしてグジャラート地方のサンジャーンを治めていた地元の王に定住許可を得て、ここに最初のゾロアスター教寺院を建立したとされる。以後も定住地を得たことを知った同胞がイランから断続的に渡ってきたとされ、次第に人口も増え、サンジャーンからさらにグジャラート各地、スーラトやナウサリ、キャンベイなどへ拡散していった。

インド移住初期から17世紀頃まで、インドには適切なゾロアスター教寺院も写本もなく、儀礼に必要なものも揃っていなかったことがわかっている。このことから彼らの信仰形態が現在よりも素朴なものであったろうことは、想像に難くない。経済的余裕が出てきた15世紀頃より、パールシーは危険な旅路とわかっていながらイランへ使者を送って、儀礼の知識や写本、儀礼用具を入手するなどしてきた。このような努力があったからこそ、彼らはインドの中で同化せず、ゾロアスター教徒コミュニティを維持することができたのである。

16、17世紀頃から財力をつけてきたパールシーが、特に熱心に取り組んだのが宗教施設の建立と入信儀礼の積極的な執行、そして慈善事業設立であった。このように信仰を支えるハード面が充実していく一方で、ソフト面はあまり顧みられなかった。ヨーロッパ人が最初にパールシーから『アヴェスタ』の写本を手に入れた18世紀頃にはすでに、パールシー自身がその内容を全く理解できなくなって久しかった。『アヴェスタ』は儀礼や日々の祈りに唱えられるものの、その内容自体は信仰を支えるものではなかったということである。

ヨーロッパ人との接触によって、パールシーはいち早くヨーロッパ教育を取り入れ、西洋化していったことで信仰形態にも変化があった。その最も大きな変化が、ヨーロッパにおける『アヴェスタ』研究をそのまま、パールシーも取り入れるようになっていったことである。以後、彼らの信仰を支えたものは、日々の祈りや浄不浄の厳格な区別、寺院での儀礼を含むコミュニティ行事から、ヨーロッパにおける研究の成果を利用した聖典解釈及び、ヨーロッパ的価値観に沿ったあらゆる宗教的慣習の再解釈へと変わっていったのである。



<写真2 お祈りをするパールシー男性
(筆者撮影)>

2. 現代の信仰形態 鳥葬

信仰形態の変化が如実に現れているのが、鳥葬の再解釈である。パールシーはこの葬法を鳥葬とは呼ばず、古くはコルシェッドニギリシュネ（太陽の検視）と呼んでいた。これは曝葬（ばくそう）とも言える。太陽は死後の審判を司るミスラ神の眼であり、遺体を太陽に晒すことは、ミスラ神に審判を委ねていることを表している。つまり鳥に喰わせることだけが、彼らの葬法の中心的要素ではなかったのである。ところがヨーロッパ人によって、そこばかりが注目されるようになると、ヨーロッパ式の教育を受けたパールシーは、鳥葬について衛生的、経済的といったヨーロッパ人の納得のいくような合理的な説明をするようになっていったのである。



<写真3 カラチの鳥葬の塔（筆者撮影）>

現在、鳥葬システムは衰退しており、存続の危機にある。特に2000年に入ってから南アジア一帯で猛禽類が激減したことは、鳥葬システム衰退に拍車をかけた。パールシー・コミュニティではシステム維持のため、多額の費用をかけて対策をしてきた²。一方で鳥葬システム維持に限界を感じる人々は少なくなく、2015年にはパールシーの運営する火葬場ができた。かつてパールシーの宗教的本拠地であったナウサリでも、高僧の批判が事前にあったにも関わらず、一般信徒の意見に従って鳥葬用の土地に土葬用の墓地を置くことを認めるなど、鳥葬に対する意識が急激に変化しつつある。

3. 現代の信仰形態 入信儀礼

鳥葬が衰退していく一方で、ますます盛んになっているのが入信儀礼として知られるナオジョテ儀礼である。ゾロアスター教では、本人が自覚できるようになってから15才までに、悪と戦うための鎧とされる聖なるシャツの「スドラ」と、あの世への羅針盤に例えられる聖なる腰紐である「クスティ」を身につけることで、一人前と見なされる。教徒はこの日以降、スドラとクスティを日々、身に付けることで、善の戦士であるゾロアスター教徒として、アフラ・マズダーの正義に従うことを想起することが求められる。

これが15世紀以前も以後も変わらぬ入信の意義である。

かつての平信徒に対する入信の方法は、自ら寺院へ行ってクスティをもらうだけの簡単なものであったようである。現在見られるナオジョテ儀礼は、もともと聖職者階級の子弟に対して行われていたクスティ授与式であった。これが15世紀頃、裕福な商人たちの優越感を満足させるために、現在のようスタイルに作り変えられていったといわれる。つまり現在見られるナオジョテ儀礼とは、ゾロアスター教の他の儀礼とは成立過程が異なり、より世俗的な意味合いが強いということである。

昨今のナオジョテは、親たちによる派手な演出で批判されている。中には100人超の聖職者に依頼したり、花々だけでなく舞台装置によって飾られた一度限りの豪華な儀礼場を設けたり、聖職者へのご祝儀よりも母親のジュエリーやサリー、華やかなパーティーにお金をかけたりすることが珍しくない。また入信後、子供たちがスドラとクスティを日々身につけ、ゾロアスター教徒として研鑽しているかといったら、そうとは言い切れない。インドであってもスドラとクスティを身に付けるのは、何かの記念日に寺院に詣でる時だけという教徒は、年齢に関係なく少なくない。

以上のように鳥葬と入信儀礼について、現状を鑑みて、パールシーの信仰形態が、世俗的な意味により囚われている傾向が見て取れるのである。



<写真4 ナオジョテ儀礼（筆者撮影）>

Ⅲ. パールシーが直面する問題と歴史の終焉

パールシーが現在最も懸念することは、人口減少と外婚の増加である。パールシー女性が一生に生む子供の数は、0.88人とも言われている。さらに年間出生者数は死亡者数の4分の1で、人口の3割が60歳以上、3割が生涯独身、4割近くが外婚を選択しているといわれている。就学や就業でインド国外へ出る人が絶えないことも、減少要因の一つとされている。たとえ配偶者であっても非パールシーのゾロアスター教への改宗は多くが認めていないこともあり、効果的な人口減少対策が見出せないでいる。

人口が少ないため、結婚適齢期でもパールシーとの出会いがほとんどないことは当然である。コミュニティではお見合いパーティーなどを開催し、対策を試みている。しかし外婚増加にはもう一つの要因がある。それは行き過ぎた慈善事業である。安定した生活が簡単に手に入る中で育ったパールシーは、学力、経済力において他の宗教コミュニティとの競争力を失ってきた。そして現在ではパールシー女性の方が男性より高学歴で

あることが少なくなく、彼女たちは安穩とした、財力のないパールシー男性と結婚した
がらない傾向がある。

人口減少だけでなく、パールシー・コミュニティには様々な問題が山積している。し
かし彼らの白黒つけたいという性質やイラン系との関係性もあって、1つの問題に様々
な意見と対立が生じ、コミュニティ内で一致団結して対応することがなかなかできない³。
これがパールシー・コミュニティの現状である。

インドで出会う実利主義的なパールシーと、ネットに溢れるオカルト的なゾロアスタ
ー教の情報にはあまりに相違があり、その間に秘技的な何かを求めたくもなる。しかし
その歴史や現状を見れば、彼らもまた時代の潮流に飲みこまれているのが見える。特異
な点があるとすれば、それはパールシーが、インドに移住して一千年以上続いた彼ら自
身の歴史の、最後の瞬間にいるということであろう。

(2017年4月3日)

¹ 20世紀初頭にパールシーを称して新聞各紙で用いられた表現。

² 例えば遺体処理促進のため、太陽光パネルを導入したり、猛禽類繁殖を試みたりして
いる。

³ 詳しくは 香月法子「さまようアイデンティティーパールシーのコミュニティ維持対
策とその課題―」梅村坦編『中央ユーラシアへの現代的視座』中央大学政策文化総合研
究所研究叢書、中央大学出版部、21、2016年、pp.147-181、等参照。

執筆紹介 香月 法子 (かつき のりこ)

中央大学政策文化総合研究所 準研究員

専攻は現代ゾロアスター教徒のアイデンティティ形成について。

<著作>

「多様化するゾロアスター教徒：改宗ゾロアスター教徒に対するパールシー・コミュニティの反応」『中央ユーラシアの文化と社会』中央大学政策文化総合研究所研究叢書 12、中央大学出版部、編著 梅村坦、新免康、2011 年、pp.235-270。

「さまようアイデンティティ - パールシーのコミュニティ維持対策とその課題」『中央ユーラシアへの現代的視座』中央大学政策文化総合研究所研究叢書 21、中央大学出版部、梅村坦編、2016 年、pp.147-181 など。



インドのキリスト教
—カトリック教会の社会福祉事業にも触れて—
Christianity in India with Special Reference
to Social Welfare Project in the Catholic Church

東北大学講師、中央大学政策文化研究所 客員研究員
岡光信子

はじめに

インドにおいて、キリスト教徒は総人口の 2.3% を占めるに過ぎない少数派である。しかし、インドの人口が 12 億人を超えるため、キリスト教徒の人口だけをとっても約 2,780 万人を数える。数字を見る限り、インドはアジアで有数のキリスト教徒の人口を抱える国である。

キリスト教徒の半数は、南インドのタミルナドゥ州とケーララ州に居住している。南インドのキリスト教徒たちが故郷を離れてインド各地に就労することで、キリスト教が全インド的な広がりを見せている。また、東北インドの七姉妹州と呼ばれる地域（アルナーチャル・プラデーシュ州、アッサム州、マニプル州、メーガーラヤ州、ミゾラム州、ナガランド州、トリプラ州）のなかで、メーガーラヤ州、ミゾラム州、ナガランド州は、キリスト教が支配的な宗教となっている。

キリスト教は、インドにおける少数派の宗教にとどまるものの、教育と医療の分野においてインド社会に与えたインパクトはきわめて大きい。キリスト教の諸活動は、公的制度が整わない時代から大きな役割を果たし、特に質の高い医療および教育をインド社会にもたらした。最高水準を誇る高等教育機関のなかに、キリスト教組織が設立・運営するものが多数存在する。現在、国内外で活躍する著名人のなかにミッション・スクールで教育を受けている者が多いのは、キリスト教系の教育機関の水準が高いことを示している。

本稿の目的は、インド社会におけるキリスト教の概要を紹介すること、キリスト教組織が行う社会福祉活動を宗教的な理念と具体例から検証し、インド社会におけるキリスト教の姿を提示することである。

最初に、インドにおけるキリスト教の概要を示すために、インドのキリスト教の諸宗派、キリスト教とカースト制度、キリスト教をめぐる状況について述べる。

次に、キリスト教の社会福祉事業の根底にある「慈善」について解説し、キリスト教の社会福祉事業が宗教的な理念の下で為されていることについて述べる。

最後に、キリスト教の社会福祉事業の実例として、タミルナドゥ州のカトリック教会が行っている女性のエンパワーメントを達成するための事業について言及する。社会福祉事業の着手に至る地域事情を検証し、宗教的な理念に基づく事業運営の特徴について考察を行う。

I. キリスト教の諸宗派

インドのキリスト教を大別すると、トマス教会、プロテスタント諸派、ローマ・カトリック教会に分類される。以下、各宗派について簡単に説明を加える。

1. 聖トマス教会

トマス教会は、西暦紀元後 53 年、イエス・キリストの使徒とされる聖トマスがインドに来到し、イエスの教えを広めたとする伝説に由来する一派である。聖トマスは、南インドの西海岸（マラバル海岸）に到着し、半島東岸のタミル地方の現チェンナイ市のあたりまで宣教活動を行ったと伝えられている。西暦 75 年に、聖トマスがチェンナイ郊外の丘で槍で突かれて殉教したという伝承が残っている。その地は「聖トマスの丘セント・トマス・マウント」と呼ばれている。チェンナイの目抜き通りマウント・ロード（現アンナー・サーライ）の名称の由来である。同市南部・マイラール地区にあるサン・トメ教会（聖トマス教会）は、聖トマスの遺体が葬られたとされる場所に建立されている。

トマス教会の典礼はシリア語で行われていることから、その信者はシリアン・クリスチャンとも呼ばれる。シリアン・クリスチャンについては、聖トマスに由来とする説だけでなく、4 世紀にインド南端部のケーララ地方に渡ってきたシリアの商人とその家族の子孫であるとする見解もある。

ケーララ州では、現在総人口の約 18%強がキリスト教徒によって占められている。前述のようにインドの総人口に占めるキリスト教徒の割合が 2.3%であることを考えれば、ケーララ州のキリスト教徒の割合は非常に大きいことがわかる。ケーララ州のキリスト教徒は、その半数以上がシリアン・クリスチャンである。

シリアン・クリスチャンは、キリスト教徒としての歴史が長く改宗以前の個々の所属カーストが特定できないこと、ひとつのカーストに相当するような人口規模を有すること、成員間で内婚を維持していることなどから、事実上独立したカースト集団と見なされている。彼らはカースト・ランキングにおいて、低カーストから改宗したキリスト教徒に比べ、かなり上位に位置づけられ、またプライドも高い。

2. プロテスタント諸派

インドにおけるプロテスタント教会の宣教は、1706 年、デンマーク王フレデリック 4 世が、現タミルナドゥ州中部にあったデンマーク領・トランキバル（現地名タランガンパーディ）に 2 人のドイツ人宣教師を派遣したことに始まる。この宣教活動は、トランキバル・ミッションの名で知られている。宣教師たちはデンマーク王によって派遣されたにもかかわらず、デンマークから当地に赴任していた司令官が抱く宣教師たちへの個人的憎悪と妨害とによって、初期の宣教活動は困難を極めることに

なった。トランキバル・ミッションの活動で特筆すべきことは、聖書を初めてインドの現地語（タミル語）で印刷したことである。

プロテスタント教会の宣教活動は、初期の苦難の時代のあと 19 世紀になって活況を帯びる。このことは、18 世紀にイギリスで起こった信仰復興運動の高まりと深く関係している。当時のイギリスには、キリスト教を海外に広めることを目的に設立された宣教団体が多数あり、いずれの団体も積極的に海外に進出して布教を行っていた。ご多分にもれず、この流れを汲む複数の宣教団体がインド各地で宣教するようになる。インド独立後、プロテスタント諸派は、それぞれ個別に行っていた宣教活動のあり方を見直し、組織を統合する動きを加速させる。1947 年 9 月、インド南部をカバーする南インド教会（Church of South India）が、1970 年には北インド教会（Church of North India）がそれぞれ設立され、統一の努力が一応の結実を見せている。

3. ローマ・カトリック教会

インドにおける初期のカトリック教会の歴史は、大航海時代に始まったポルトガルの植民地拡大と国力の衰退を抜きに語ることはできない。1494 年、ポルトガルは、スペインのトルデシーヤスでスペインと条約を締結し、この条約に基づいてインドの領土権を正式に獲得した。1498 年、ヴァスコ・ダ・ガマが喜望峰を経由するインド航路を発見すると、ヨーロッパからアジアへの航海日数が飛躍的に短縮し、ポルトガルの海外進出が加速することになった。

1510 年、ポルトガルは東洋貿易の拠点とすべくインドの西海岸にあるゴアを占領する。さらに 1514 年、ローマ教皇レオ 10 世より「パドロアド」と呼ばれる聖職者叙任権とそれを政治経済的に維持する義務を与えられる。1533 年、ポルトガルによりゴアに司教管区が開設され、インドにおけるカトリック教会の宣教がゴアを拠点として展開されていくことになる。しかし 17 世紀に入り、植民地争奪戦で後発のオランダとイギリスの攻勢をうけ、ポルトガルはインドにおける商業活動も停滞するようになる。それに伴い宗教的な義務も履行できなくなっていく。

16 世紀から 17 世紀の間、インドにおけるカトリックの宣教は、1542 年にインドでの活動を開始したイエズス会が全権を握っていた。1543 年、イエズス会は、フランシスコ・ザビエルをゴアに遣わし、インドの地でキリスト教の伝道を指揮させることにした。ザビエルは、ゴアにおける司牧だけでなく精力的に地方に赴いて宣教活動を行い、南インド沿岸部の多数の漁民たちに自ら洗礼を授けている。こうした漁民カーストの改宗は、個人ではなく村単位で行われる集団改宗が多かった。16 世紀の半ばには、カンニヤークマリの東側のフィッシャリー海岸から西側のマラバール海岸に至るまで、沿岸部の住民のほとんどをキリスト教徒に改宗させることに成功していた。改宗者の数があまりにも多かったので、ザビエルは、海水を用いてキリスト教の入門式である洗礼を行ったとさえ伝えられている。

インドのカトリック教会は、ラテン典礼を奉じるローマ・カトリック教会と東方典礼を奉じる東方カトリック教会に分けられる。ローマ・カトリック教会は、司教がローマ教皇に直属し、カトリック教会の多数派を構成する。少数派の東方カトリック教会は、独立教会でありながら、ローマ・カトリック教会の教義を受け入れ、ローマ・カトリック教会とフル・コミュニオン¹の関係にある。東方カトリック教会の典礼は、司祭が祭壇に向かってミサを行うなど、ローマ・カトリック教会の典礼と異なる。インドの東方カトリック教会は、そのほとんどがケーララ州に存在する。

II. インドのキリスト教徒

1. インドにおけるキリスト教の宣教政策

世界におけるキリスト教の宣教政策は、方法論的にふたつに大別することができる。ひとつは、社会の底辺に属する層に的を絞って伝道し、集団改宗させてキリスト教化する方法である。もうひとつは、エリート層、指導者層、または特権階級に狙いを定めて彼らを改宗させてから、トップダウン方式でキリスト教を全体に行きわたらせる、もしくは国教に採用させていく方法である。

当初、インドに派遣された宣教師たちは、プロテスタント・カトリックを問わず、後者の宣教政策、高カーストのヒンドゥー教徒たちを改宗させ、彼らの影響力をもってキリスト教をインド社会に定着させようと試みた。しかし西洋人宣教師たちは肉食を行うなどインドの低カーストの生活習慣に通じる諸要素を保持していたことから、高カーストのヒンドゥー教徒たちは、キリスト教を下層民の宗教と見なし、改宗にきわめて消極的であった。予想に反して、また皮肉なことに、キリスト教に改宗することになったのは、カースト制に伴う差別と弊害に苦しむ不可触民をはじめとする下層カーストの人々であった。

プロテスタント教会について言えば、高カーストをキリスト教化する方針にもかかわらず、実際には低カーストの集団改宗が多くなったことから、1860年頃を境に低カースト中心の伝導へと方向転換することになった。

改宗の事情はカトリック教会でも同様であった。たとえば、タミル地方を担当していたフランス人宣教師たちは、当初高カーストのヒンドゥー教徒の改宗を目指したが、思うように改宗者を出すことはできなかった。19世紀の後半、現実を照らして当初の方針を諦め、不可触民への宣教に専念することになる。

2. キリスト教とカースト制度

「神の前での平等」というテーゼを掲げるキリスト教は、カースト社会のなかで長期にわたり非人間的な差別に甘んじきた不可触民や低カーストの人々を引きつけた。しかし、プロテスタント教会とカトリック教会は、カースト問題への対処、および改

宗者への支援をめぐって大きく立場を異にしていた。

プロテスタント教会は、カースト的身分秩序を布教への障害と見なし、カースト制に起因するさまざまな不平等に対抗していく道を選んだ。さらにプロテスタント教会は、集団改宗は教会による保護をあてにする信者を増やすに過ぎないという見解に立ち、キリスト教を真に理解した個人単位の改宗を歓迎した。さらに、教会は、改宗者が社会的に向上する便宜を積極的に供与し、その一環として改宗者の子弟に教育の機会を授けた。プロテスタントに改宗後、高等・専門教育を受けて医師や弁護士のような専門職に就くような者を多数輩出し、社会的な地位を上昇させるカースト集団も現れている。

キリスト教に改宗した暁には、改宗に伴う教会からの恩恵によって、改宗前に比べ社会・経済的な状況が改善されるとする観念が世間には根強い。教義への共感からではなく、教会から得られる保護や援助を目当てに改宗したという含意をもつライス・クリスチャン（＝お米目当てのキリスト教徒）という呼称が、主としてヒンドゥー教徒側からキリスト教徒全体を揶揄する時によく用いられるが、こうした蔑称は、上に述べた社会通念の存在を暗示している。

一方、カトリック教会は、既存の社会構造を温存したままインドをキリスト教化することも可としていたことから、カースト制度を容認する姿勢をとった。たとえば、17世紀、タミルナードウのマドゥライ地方の宣教（通称マドゥライ・ミッション）において、イエズス会士ロベルト・デ・ノビリが採った宣教方法はその極端な事例である。彼は、カースト別の礼拝所を認めただけでなく、自らインドの最高カーストであるブラーフマンを名乗り、インドの支配者階級に相当するローマ貴族の出身であることを強調した。彼は、ブラーフマンの身なりをし、ブラーフマンのように菜食に徹し、現地語（タミル語）で典礼を行い、ヒンドゥー聖典の形式や韻律に則ってキリスト教の讃歌を歌ったのである。

カトリック教会は集団改宗を肯定的に捉えていた。また、カトリック教会は、プロテスタント教会とは対照的に、改宗した者たちの社会的状況の改善よりもカテキズム（宗教要理教育）をはじめとする教化活動に力を注いだ。皮肉なことに、カースト制度を容認し、集団改宗を歓迎するカトリック教会は、思うように信者を獲得できなかった。

結論的に言えば、インドにおけるキリスト教の宣教活動の成否、具体的には新規改宗者数の確保は、カースト制を是認するか否か、および改宗者への経済的な支援があるか否かに大きく左右されるものであった。プロテスタント教会の場合、教義を理解した個人の改宗を望んでいたが、カースト制そのものを否定したことから、低カーストの人々を魅了し、集団改宗が跡を絶たなかった。さらに、プロテスタント教会は、改宗者の社会状況を改善させるための支援を積極的に行ったことが、より多くの信者を引きつけたことも事実である。

一方カトリック教会は、プロテスタント教会と対照的に、カースト制を是認し集団

改宗を歓迎したものの、現実には改宗者を増やすことはできなかった。その理由としては、改宗者に対する社会・経済的な支援ではなく宗教的な指導を重んじ、改宗による世俗的なメリットを信者側が期待できなかったことが大きい。

教派や宣教政策の違いにもかかわらず、19世紀後半になるとプロテスタント教会およびカトリック教会の信者は、結果的には不可触民とそれに準じる低カースト出身者によって占められるようになった。現在、インドの全キリスト教徒の約60%が出自を不可触民に辿るといふ統計もある。

Ⅲ. キリスト教をめぐる社会状況

1. キリスト教への改宗の動機

インドの歴史を顧みると、キリスト教への改宗者が増加する時期は、飢餓や疫病が猖獗を極めた時期としばしば重なっている。キリスト教の宣教の初期段階における改宗者のなかには、飢餓がもとで孤児となり、宣教師の世話になったことを契機としてキリスト教徒になった者たちが多かった。孤児たちの改宗は、危機に際してキリスト教の宣教師たちが弱者に迅速な支援を与えるということや、社会でもっとも抑圧されている人々にも解放の機会が与えられるということを経験した。

生存にも関わるような危機に直面したことを契機に異なる宗教に入信し、新しい宗教とその組織に保護と救済を求めることは、インド史のなかで繰り返されてきたことであり、キリスト教への改宗もその例に漏れない。インド独立以前における不可触民や低カーストの改宗も、カースト差別と表裏一体のヒन्दゥー教から逃れ、キリスト教という新しい宗教のもとで期待される便宜や利益に誘引されたものであることは否定しがたい。

それに加え、キリスト教への改宗は、改宗者が教育や就労の機会に浴し、宣教師という影響力のある庇護者のもとで世俗的な便宜をも得ることができることを示すものでもあった。教会という後ろ盾を得た低カースト出身者のなかには、タミルナドゥ州南部を本拠地とするナーダールたちのように、19世紀後半から20世紀初頭にかけて、高等教育や専門教育の恩恵を活かして社会・経済的な地位を顕著に上昇させた集団も現われた。

2. 戦後の状況変化

しかし1947年のインド独立以降、状況に大きな変化が生じる。独立後の憲法により、不可触民は指定カーストとして保護の対象となり、教育現場、公務員への採用、議会の議席などにおいて一定の留保枠が設けられたのである。それに伴い、指定カーストに分類される集団に属していた者であっても、キリスト教徒になってしまえば、後進階級バックワードクラスに分類され、ヒन्दゥー教徒の指定カーストの人々が享

受し得る特権から排除されることになった。カースト制の理念においてのみならず、実生活でも社会の低辺に位置づけられる不可触民にとって、キリスト教への改宗から得られるものよりも、失うもののほうが多くなったのである。このような状況のもと、不可触民出身のキリスト教徒のなかから、敢えてキリスト教を棄て、ヒンドゥー教へと回帰する道を選ぶ者も現れるようになった。

また、近年、外来宗教であるキリスト教に対する反動的な動きが見られるようになってきている。特に、2000年代前半、キリスト教に対する風当たりが強かった。この時期、聖職者や修道女に対する嫌がらせ、キリスト教徒の誘拐や殺人、集落の焼き討ちなど、ヒンドゥー教徒たちによる見せしめ攻撃の標的にされるなど、緊張が高まった。

排他的なヒンドゥー・ナショナリズムを標榜するインド人民党（BJP: Bharatiya Janata Party）が勢力を急伸させたことなども手伝って、ヒンドゥー教以外の宗教に対する警戒心が強まり、2002年10月5日、タミルナードゥ州でヒンドゥー教徒が他宗教に改宗することを規制する反改宗法が成立した。ただしこの法規は州ごとに定められるもので、全インドに一律に適用されるものではない。反改宗法の成立も、タミルナードゥ州に限るものである。

現在、キリスト教徒に対する暴力的な攻撃は落ち着いたように見える。しかし、近年、インド政府は、外来の宗教であるキリスト教を標的にし、国内におけるキリスト教系団体の活動を規制する動きを強めている。キリスト教系の団体がインド国内で活動することを制限しているのは、1976年に制定された **Foreign Contribution (Regulation) Act (FCRA)** という法律である。この法律は、国家的な利益とそれに関連する事項に関連する有害な活動に対して、特定個人や団体または会社が外国の資金や優遇を受けることおよびそれらの利用を規制し、特定個人や団体または会社が外国の資金や優遇を受けることおよびそれらの利用を禁じている。

2010年、FCRAが改正されると、こうした動きがさらに加速化した。つまり、海外の資金に依存するキリスト教系の非政府組織がターゲットとなり、インド国内での活動を制限される状況が生まれたのである。特に、2014年5月、BJPのナレンドラ・モディが首相に就任以降、こうした動きが強まったと言われている。

FCRAの厳格な適用により、活動を停止した非政府組織のひとつにキリスト教の慈善団体 **Compassion**（本部：アメリカ合衆国・コロラド州）がある。Compassionは、「海外からの資金調達に事前の許可がある団体」のリストに加えられ、それにより海外からの資金調達が遮断された。

Compassionは、インドの子供に対する人道支援で48年の活動実績をもち、拠出金の額が年間5,000万ドル以上となる規模の大きい団体である。Compassionは、インド国内の地域教会を基盤とするプロジェクト（約500）を通して、約14万7千人の乳児、児童および10代の若者を支援してきた。

しかし、2017年1月、Compassionは、運用資金のめどが立たなくなったことから、580人の現地スタッフに「2017年3月15日をもってインドの現地事務所を正式に閉

鎖する」旨のメールを送付した。2017年3月15日、Compassionはインドにおける全事業から撤退した。

Compassionのインド撤退は、アメリカ政府高官を巻き込み、インドとアメリカとの間で外交問題にまで発展してた。ジョン・ケリー元国務長官のような著名な政治家がロビー活動を行ったが、インド政府の決定を覆すことはできなかった²。

IV. キリスト教の社会福祉活動と「慈善」

キリスト教の社会福祉の原動力である「慈善」という概念を解説し、キリスト教組織が行う社会福祉事業が宗教的な動機に基づくことを述べる。

キリスト教の考え方によれば、教会は、神の救いの計画を実現させ、新しい創造に向かって働きかける義務がある。教会は、この計画を実現するため、特に貧しい人々に仕え、正義に基づく社会を構築することが求められている。

キリスト教は、「信仰」「希望」「慈善」という3つの美德のなかで「慈善」を最も重視しており、キリスト教の歴史において最初期の段階から「慈善」に基づく救済行為は行われている。そして「慈善」の精神は、肉体的にまたは精神的に助けが必要な人に手を差し伸べる「慈悲の善行 (C Corporal Works of Marcy)」という具体的な行為のなかに現れている。

身体的な「慈悲の善行」は、①飢えている人に食事を与える、②渴いている人に水を与える、③裸の人に服を与える、④囚人を慰問する、⑤家のない人に住処を与える、⑦病人を見舞う、⑧死者を葬る、とされている。精神的な慈善の行為 (Spiritual Works of Marcy) は、①罪人をたしなめる、②無知な人を導く、③迷う人に助言を与える、④悲しむ人を慰める、⑤誤りに忍耐強く耐える、⑥生きる者と死者に祈りを捧げる、とされている³。

キリスト教では、イエス・キリストは、踏みにじられた人、社会の周縁にいる人、貧しき人を慈しんだ人物とされている。キリスト教徒は、すべての人のなかにキリストの姿を見出し、貧しき人に仕えることがキリストに仕えることだと教えられている。ゆえに、キリスト教徒の「慈善」の行為は、キリストに対する愛から生じていることになるという⁴。

このように、キリスト教は「慈善」を重視しており、キリスト教の宣教は、多くの場合、宗教的な教えを広めるという布教にとどまらず、教会が関与する機関もしくは宣教師主導による社会福祉活動が随伴する。それゆえ、キリスト教の教えに基づき、個人もしくは団体が世界各国で様々な「慈善」に基づく行為を行っているのである⁵。

インド社会に目を向ければ、インドにおけるキリスト教の宣教は、初期の段階から社会福祉的な要素が不可欠なものであった。こうした伝統は、今日に至るまで脈々と受け継がれている。特に、教育・医療の分野におけるキリスト教の貢献は、群を抜いて大きく、社会的にも広く認知されている。

キリスト教が社会福祉分野で大きな貢献を果たすことができたのは、第一義的にインドにおいて公的な社会福祉制度が十分に整備されていなかったからである。キリスト教の社会福祉活動は、公的な福祉の枠から外れた多数の受け皿として機能していたのである。現在でも、公的な社会福祉制度の種類と規模は限れている。そのため、インドの教会は、宗派の違いに限らず、「慈善」の精神に基づく活動に取り組むという傾向が強い。

さらに、キリスト教の機関が提供するサービスは、キリスト教徒だけを対象にせず、すべての人に分け隔てなく供与され、地域の教育や医療を支えている。こうしたことから、キリスト教組織の提供するサービスは公共性が高くなる。

キリスト教は絶対的少数派にはとどまるものの、インド社会にもたらしたインパクトは大きい。現在でも、多くのキリスト教組織が規模の大小にかかわらず、社会福祉事業を展開し、公的なサービスを補っている。

V. カトリック教会の社会福祉事業への取り組み

カトリック教会が行う社会福祉事業の取り組みの一例として、タミルナードゥ州のタッカライ教区⁶（東方カトリック教会）が設立した Kanya Kumari Social Service Society (KKSSS) という社会福祉事業を行う機関を取り上げる。

1. キリスト教の理念に基づく社会福祉事業

1972年、タッカライ教区は、キリスト教の理念に基づき「慈善の善行」を具現化する方法として、社会福祉事業を行う KKSSS を設立した。KKSSS の使命は「貧しい人と周縁に置かれた人がコミュニティを構成し、能力を創出し、それによって持続的な発展を進める」となっている。また、KKSSS の標語は「手をさしのべることとエンパワー」で、そのヴィジョンは「人間の価値と威厳が価値あるものとされ、尊重される社会」となっている⁷。

KKSSS は、地域の発展が教区の人々の生活に向上をもたらすという信念をもち、事業の対象者をカーストや宗教の如何に関わらず全ての人としている。複数の事業のなかで、KKSSS が最も力を入れているのは女性のエンパワーメントである⁸。

インドは、女性が大統領や首相になるなど女性が著しい活躍を行っているが、男性支配的な社会であり、女性は社会・経済的な周縁に置かれていることが多い。KKSSS が女性のエンパワーメントを重視するのは、人口の半分を占める女性が十分に活躍できない社会は発展しないという考えに立脚するからである。

KKSSS が考える女性のエンパワーメントは、「女性による決定権を支配する機会を増やし、女性が様々なサービス、機会、機知に近づくことができること」である。つまり、エンパワーメントによって、「女性が経済活動に参加して収入を確保し、政治参

加する道が拓かれ、必要な教育を享受できるようになれば、女性が健康で幸せな状態を確保できる」という構図が生まれるというのである⁹。

2. タッカライ教区の女性をめぐる社会環境

KKSSS が女性のエンパワーメントに力を注ぐのは、タッカライ教区があるカンニヤークマリ県の女性をめぐる社会状況に起因する。タッカライ教区の女性が置かれている社会状況と女性のエンパワーメントの必要性について述べる。

インドの村落部では、女性は男性に比べて社会的な制約が多く、周辺に置かれることが多い。KKSSS が所在するカンニヤークマリ県は、非常に保守的な地域であり、女性に対する暗黙の制約が根強く残っている。特に、女性に対する結婚への無言の圧力は想像を絶するものがある。経済的・社会的な状況にかかわらず、女性はできるだけ早く結婚という選択肢を選ぶべきだという考え方が蔓延し、女性だけでなく女兒を持つ家族にも大きなプレッシャーとして重く押し掛かっている。

こうした無言の圧力ゆえに、女性は、行き遅れというレッテルが張られる 25 歳までに結婚することが多い。自己の意に反した結婚であっても、拒絶することが難しい。結婚相手の素性に問題があっても、結婚後の生活に困難が予想される場合でも、女性の場合、結婚することが優先される。

また、カンニヤークマリ県は、娘を結婚させる際、ダウリーと呼ばれる持参財を用意することで有名である。ダウリーの額は、その家の経済状況を示す指標になっており、可能な限りの多額のダウリーを持たせ、ダウリーの額を競い合う風潮がある。また、嫁ぎ先の条件が良くなるにつれて、ダウリーの額は高額になる。ダウリーなしの結婚は、事実上不可能である。このような状況のなか、貧しい家庭の場合、娘の結婚は社会的なプレッシャーだけでなく経済的にも大きな負担を伴う。この地方では、ダウリーを工面するために、家を売る、借金をすることは珍しくない。

また、タッカライ教区は、そのほとんどが貧しい村落である。さらに、男女に限らず高等教育や専門教育を受ける人が少ない。特に、十分な教育を受けていない女性が安定した職業に就くことは難しい。結婚前の女性の多くは、低賃金で働く、または無職という状況にある。

高等・専門教育を受けていない女性は、結婚後、就労の機会がなく収入をもたらさない。そのため、経済力のない女性は、自尊心を失い、社会のなかでも家庭のなかでも弱い立場に置かれる。教育の欠如は、女性が自尊心を保つことさえ困難にするのである。

こうした社会状況ゆえに、タッカライ教区は、女性のエンパワーメントに力を入れ、女性の地位の底上げを実現できる事業を重視しているのである。

3. KKSSS による女性のエンパワメントを目的にした事業

KKSSS による女性のエンパワメント事業の具体例を検討する。

KKSSS は、女性のエンパワメントを目標に、V-Star Creations Pvt. Ltd(V-Star) の業務を請け負う形で、エンジェル・ガーメントという女性下着を製造するユニットをパルガル小教区の教会の敷地内に設立した。

KKSSS がエンジェル・ガーメントをパルガル小教区に設立したのは、そこで始められた前身の事業が失敗したからである。エンジェル・ガーメントの前身は、パルガル小教区の女性たちが小教区の主任司祭に懇願して始めた布カバンを制作する作業所である。しかし、十分な準備もなく始めた事業は軌道に乗らず、年間を通じて安定した仕事を得られる職場がほしいという要望が生まれた。KKSSS は、それに応える形でエンジェル・ガーメントを立ち上げたのである。

エンジェル・ガーメントの設立に際して、KKSSS は V-Star と以下のような取り決めを交わした。KKSSS は、プロモーターとして製造機械（マシン）、作業所として十分な空間、作業員と作業を順調に進める責任者を提供する。V-Star の方は、自己負担で作業員のトレーニングを行う、製品の原材料の提供、製品のマーケティングに責任をもつ。

2011年3月10日、エンジェル・ガーメントは、KKSSS がユニット・デレクターとして司祭（1人）、担当修道女（1人）を配置し、V-Star は製造される製品の管理と指導を行う品質管理者の社員（1人）を派遣し、27人の女性作業員で始まった。開業に先立って、V-Star は技術指導員を派遣し、作業員に対するトレーニングを約3ヶ月かけて行った。開業前のトレーニング期間、作業員は決められた手順に従って必要な技術を習得しなくてはならなかった。この期間、少額の手当だけがしか受け取れず、作業員にとっては大変辛い時期だったという。

現在、エンジェル・ガーメントは、KKSSS のなかでも最も成功したユニットとなっている。2013年、エンジェル・ガーメントは、製品の返品率が少なく納期を遵守することが評価され、V-Star から優秀賞を受賞している。さらに、順調に仕事量および作業員が増え、2014年6月、会計を担当する修道女が1人加わった。2015年3月の作業員は44人、2016年10月の作業員は65人となっている。

労働時間は、午前9時から午後5時半である。しかし、製品の納期が決まっており、作業員のノルマも決められているので、始業時間前に作業を開始し、就業時間以降でも働くことができる。就業時間以外に作業を行う場合、ユニット・デレクターから作業所の鍵を借り、作業後にそれを返却する。ひとつの完成製品に対して賃金が支払われるという制度（piece basis）が導入されているので、ひとりあたりの日当は150～200ルピーとなっている。作業員の月給は日当プラス出来高となる。毎月受け取る給与（数千ルピー）は、作業員にとって貴重な現金収入である。

エンジェル・ガーメントの運営を軌道に乗せている主要な要因は、宗教組織が全面

的に関与して資金面の調達を円滑にしていることに加え、宗教者が弱い立場にある作業員を精神的に支えていることである。特に、作業員に対する宗教者の関与はエンジェル・ガーメントの運営にプラスの要因となっている。

宗教者のエンジェル・ガーメントにおける仕事は、以下のようなものである。司祭であるユニット・デレクターは、ユニットを円滑に運営することに責任をもつ。ユニット・デレクターの仕事は、出納簿の管理、インフラの確保など運営上の便宜を図るだけでなく、作業員の精神面を含む健康を管理することとなっている。司祭は、男性かつ宗教者として権威をもち、女性作業員に対して大きな影響力をもつ。作業員が精神的な悩みを抱えているとき、司祭は現実的な解決策を提示するだけでなく、宗教的な権威をもって祈りや祝福を与えることで彼女たちを安心させる。

また、エンジェル・ガーメントに勤務する2人の修道女は、作業工程に責任をもつだけでなく、作業員に気さくに接するなかで彼女たちを精神的に支えている。特に、修道女は作業員の家族構成や家庭事情を熟知し、作業員の些細な異変にも注意を払い、異変に気付くと個別の相談にのっている。修道女の判断を超える問題は、司祭に引き継がれる。

エンジェル・ガーメントでは、司祭と修道女という宗教者が運営に深く関与し、作業員への対応にも心を砕いている。作業員への精神的なケアは作業能率に直結する。エンジェル・ガーメントの作業効率の高さは、操業2年目にして優秀賞を受賞したことが証明している。

司祭と修道女という宗教者の連携もあり、エンジェル・ガーメントの作業員は、精神的なケアを受けながら働き続け、安定した収入を確保している。多くの作業員は、エンジェル・ガーメントで働くことで経済的な貢献が可能となり、それが自己回復に繋がり、未来に希望を見出すようになったと述べている。

エンジェル・ガーメントの特質は、宗教者が宗教的な理念に従って作業員に精神的なサポートを行っていることにある。エンジェル・ガーメントのほとんどの作業員は、経済的な困難と家庭のトラブルを抱えており、精神的な支えを必要とする弱者である。こうした弱者への対応は、キリスト教の「慈善」に基づくものであり、宗教の精神に基づく行為である。つまり、エンジェル・ガーメントは、宗教者が運営に積極的にかかわることでキリスト教の精神に基づく運営を行い、「慈善」の行為を実現させるユニットとなっているのである。

VI. まとめ

インドのキリスト教は、総人口の2.3%に過ぎない少数派である。しかし、キリスト教は、公的な社会福祉制度が導入される以前から、宗派の別を超えて社会福祉の分野で様々な事業を手掛けてきた。特に、教育と医療分野における貢献は非常に大きく、現時点においても、この分野におけるキリスト教の存在は計り知れない。キリスト教

が宣教地で社会福祉事業を行うのは、弱者に対して手を差し伸べるという「慈善」の精神を実践するためである。

本稿で取り上げたエンジェル・ガーメントは、カトリック教会が母体となり、宗教者が作業員を支えながら運営されている。エンジェル・ガーメントの女性作業員は、労働により経済力をつけ、様々な困難に立ち向かう自信と強さを身に着けている。その意味でエンジェル・ガーメントは、女性のエンパワーメントを現実のものとする機関である。しかし、すべてのキリスト教の機関が成功裡に運営されているわけではない。エンジェル・ガーメントは、諸条件が重なり、キリスト教の精神に基づいた運営が成功した一例に過ぎない。

インドのキリスト教は、少数派の宗教であるが、社会福祉の分野において着実な成果を残しながら社会に定着してきた。キリスト教は、マイノリティーの宗教として様々な試練を経験しつつ、共存の道を模索しているのである。

Acknowledgements:

I express my gratitude to Fr. Saji Elambasseril SDB, director of the KKSSS, Fr. Jose Muttathupadm, president of the KKSSS, Fr. Mathew Thekkekutt, unit director of Angel Garments, Sr. Annie Rose FDSHJ, sister in charge of Angel Garments, Sr. Princy FDFHJ, accountant of Angel Garments, and Sr. Soji FDHJ, staff member of the KKSSS.

My special thanks are due to Br. Abraham M. Antony SDB for theological information about Charity, Ms. Josebin Das, Ms. Jobi Das, and Mr. and Mrs. Das for their help and hospitality toward me, and the workers of Angel Garments for their valuable information.

Last but not least, I am very grateful to Mar George Rajendran SDB, bishop of Thuckalay and patron of the KKSSS, for his understanding during this research.

(2017年4月3日)

¹ フル・コミュニオンとは、教会組織、共同体、個人が相互に同じ教義を受け入れ、両者の間に一致があることを表すキリスト教の専門用語である。フル・コミュニオンの関係にある教会間では、信者は所属する教会以外でも聖体拝領が可能である。

² “U.S. to Question India About Ban on Christian Charity”

https://www.nytimes.com/2017/03/09/world/asia/compassion-international-india.html?emc=edit_ae_20170309&nl=todaysheadlines-asia&nid=58306319 (2017/03/15 閲覧)。

「インドの子供 14 万 5 千人が人道支援失う可能性、外国寄付規制法改正で」

<http://www.christiantoday.co.jp/articles/23108/20170127/145000-indian-children-l-oss-support-compassion.htm> (2017/03/15 閲覧)。

「インドで 50 年活動のキリスト教 NGO、政府による資金遮断で全面撤退」

<http://www.christiantoday.co.jp/articles/23428/20170315/compassion-pull-out-of-all-projects-india.htm> (2017/03/21 閲覧)。

³ Ekstrom, Reynolds R. *The New Concise Catholic Dictionary*. Mumbai: ST. PAULS. 2002. pp. 68-69, 272, 280.

⁴ Okamitsu, Nobuko (2017) “Women’s Empowerment through a Social Welfare Project under the Catholic Church in South India”. *Annual Bulletin of the Institute of Policy and Cultural Studies*. Vol. 20. (in press).

⁵ Ekstorm, Reynolds R. *The New Concise Catholic Dictionary*. Bombay: ST. PAULS. 1995. pp.68-69.

⁶ 1996 年、タッカライ教区は、タミルナードゥ州の最南端に位置するカンニヤークマリ県とティルネルベリ県の一部を治める形で設立された。現在、総面積 1793.94sq.Kms、38 の小教区、教区で働く司祭 65 名（所属司祭 40 名および教区で働く司祭 25 名）という小規模な教区である。

<http://www.gcatholic.org/dioceses/diocese/thuc0.htm> (2017/03/01 閲覧)。

⁷ Kanyakumari Social Service Society. n.d. *Annual Report for the year of 2012-13*.

⁸ “Kanyakumari Social Service Society”

<http://www.kksss.org> (2016/03/01 閲覧)。

“Catholic Diocese of Thukalay”

<http://www.thukalaydiocese.org/home/inner/1> (2016/03/01 閲覧)。

⁹ Kanyakumari Social Service Society. n.d. *Annual Report for the year of 2009-2010*.

執筆者紹介 岡光 信子 (おかみつ のぶこ)

東北大学大学院文学研究科博士課程修了、博士（文学）。現在、東北大学講師、中央大学および東北学院大学・客員研究員。専攻は宗教人類学。インド、インドネシア、シンガポール、マレーシア等において、映画、食、服飾、宗教儀礼、宗教組織の社会貢献などに関する現地調査を行う。近年、東南アジアを中心にインド系移民について宗教の社会的意義という観点から調査を行っている。著書として『新版 インドを知る事典』2016 年（東京堂出版）、『アジアのハリウッド』2010 年（東京堂出版）などがある。



インドの図書館事情 —宗教書籍を中心に— Libraries in India with Special Reference to the Collection of Religious Publications

東北大学附属図書館 情報サービス課 参考調査係長
吉植庄栄

はじめに

インドの国勢調査（2011）¹のデータによるとインドの宗教の内訳は、ヒンドゥー教徒 79.8%、イスラーム教徒 14.2%、キリスト教徒 2.3%、シク教徒 1.7%、仏教徒 0.7%、ジャイナ教徒 0.4%である。インドは多数の宗教が混在し、多角的な宗教環境にある。

インドでは、宗教実践が盛んで宗教が日常に溶け込んでおり、その姿はボリウッド映画でも垣間見る事ができる。2009年、日本で公開された大ヒット映画「きつと、うまくいく（原題：3 Idiots）」の主人公の一人、ラージュ・ラストーギーは信心深いヒンドゥー教徒と設定され、大学の試験など困難に直面すると、祭壇のヒンドゥーの神々に篤く祈ることを欠かさない。日本人が見ると彼の姿は滑稽だが、宗教実践が盛んなインドでは自然なことである。

インドは宗教的なイメージが強いが、一方でIT大国として急速に力をつけ、グローバル企業で活躍する人材を多く輩出し、「数学や理工系分野に強い国」というイメージもある。こうした優秀な人材を育成する制度として、国家の威信をかけた科学技術研究教育を行う高等教育機関がある。ここで理数系教育を受けた多くの秀才が、インドを飛び出し世界で活躍している。このようにインドには「豊かな精神世界を持つ国」と「優秀な理工系人材を多数輩出する国」という二面性がある。

本稿ではインドにおける宗教を読み解く一つの視点として、図書館における宗教書籍をクローズアップする。具体的には、公共図書館、科学技術研究教育機関の図書館、宗教組織が母体となり設立された大学の図書館の3つの事例を紹介したい。

I. インドにおける図書館の概略

1. 古代・中世インドの図書館

古代インドの図書館で代表的なものは、現ビハール州に存在したナーランダ大学（Naranda）の図書館である。ナーランダ大学は、5世紀から13世紀初頭にかけて仏教の研究拠点として栄えた。最盛期には1万人以上の仏教を学ぶ者、約1千5百人の教員が生活しており、仏典を中心に、一説では5百万冊以上を所蔵する図書館が存在していたと言われている。インド哲学・仏教学で著名なナーガルジュナ（Nagarjuna: 龍樹、2世紀～3世紀頃）が講義を行い、玄奘三蔵（602?-664）もここで学んだという。

現在、ナーランダ大学の図書館は、イスラーム王朝に完全に破壊され遺跡となっている。

また、イスラーム王朝のムガル帝国（Mughal Empire, 1526-1857）がインドを支配した 16 世紀以降、歴代皇帝の個人図書館が建てられている。初期ムガル帝国の皇帝達は、第 6 代のアウラングゼーブ（Aurangzeb, 1618-1707）を除く全員が文芸と音楽への支援に力を入れ、図書館も発展した。

2. イギリス統治下の図書館

17～18 世紀、イギリスが東インド会社（East Indian Company）を通して、インドの植民地化を進めた。ベンガル州カルカッタは、イギリスのインド経略の中心拠点であった。1835 年、このカルカッタに英国式の図書館が設立される。これがカルカッタ公共図書館（Calcutta Public Library）である。1903 年、この図書館は、一般公開の帝国図書館（Imperial Library）となった。インド独立後、1948 年、この図書館はインド国立図書館（National Library）となる。



＜写真 1 帝国図書館（カルカッタ）
（University of Houston, Digital Library より）＞

インド各地には、カルカッタ公共図書館をはじめ、英国式の図書館が建築されていった。また高等教育機関の設立も進み、それと同時に大学図書館も整備されていく。

3. インド人による図書館運動

イギリス統治下の図書館設立の動きと並行して、20 世紀初頭からインド人独自の図書館運動が伸展する。インド西部バローダ藩王国のサヤジラオ 3 世（Maharaja Sayajirao Gaekwad III, 1863-1939, 在位 1875-1939）は、アメリカの図書館が教育に大きな影響を与えていることに感銘を受け、自領にアメリカ型の図書館ネットワークを構築した。義務教育と図書館との両輪で、自領民の教育レベルを上げようと試みたのである。

この運動が始まって約 10 年後、1924 年、マドラス大学図書館を拠点に S.R.ランガナタン（Shiyali Ramamrita Ranganathan, 1892-1972）の活動がはじまる。ランガナタンは、イギリス留学で得た知見を活かし、マドラス大学図書館の充実のために日夜邁

進した。その知見と経験から図書館業務の背景にある公理として『図書館学の五法則 (The Five Laws of Library Science)』(1931)を發表する。ランガナタンは、図書館運動のリーダーの一人となり、インド各地で大きな業績を上げ「インド図書館運動の父」と呼ばれる。

4. 科学技術研究と図書館

インドの初代首相ジャワハルラール＝ネルー (Jawaharlal Nehru, 1889-1964) は、二度と他国に屈しないという理念のもと、科学技術研究を重点化した。政府は、その政策の一環として科学技術文献のセンターをランガナタンの指導の下に立ち上げる。これが、1952年創立のインド国立科学ドキュメンテーションセンター (INSDOC: Indian National Scientific Documentation Centre) である。これは現在、インド国立科学コミュニケーション情報資源研究所 (NISCAIR: National Institute of Science Communication and Information Resources) となっている。また、科学技術研究を普及させる高等教育機関整備の一環で、科学技術文献の蓄積と提供を行うための図書館の拡充が進められていく。

5. インドの図書館の2つの潮流

古代インドの図書館は、典籍蓄積と教義伝承の機能を持つものであった。その後、図書館の役割は皇帝をはじめとする社会の統治層のコレクションを蓄える役割が中心となった。イギリス統治下、インドは近代的な図書館の仕組みを学び、サヤジラオ3世が種をまきランガナタンが図書館を育てていく。これらは、人々の知的レベルを上げる目的のもので、現在は公共図書館として存在する。

一方、科学技術研究を奨励し、国を繁栄させることで他国に二度と屈しない、という考えの下に、欧米科学技術文献の蓄積と提供を行う科学技術レベル向上のための図書館が整備された。これが科学技術研究教育機関の図書館である。インドの図書館は、この2種が主流を占める。

II. 公共図書館

1. 概況

インドの公共図書館は、国内に約5万4千館存在するという報告書がある。日本の公共図書館数が全国で約3千2百館(2016年度)であることに対して、この図書館数は人口比を換算してもそれほど低い数字ではない。しかし、インドの公共図書館の多くは、児童室もなく、椅子は壊れているような状態のものも多く、支える人材も不足している。

OCLC (Online Computer Library Center: 世界最大の図書館検索システム World Cat を運営する組織) のデータによれば、インドの公共図書館数は約 2 万 9 千館である。つまり、統計上、インドには公共図書館が多くあることになるが、世界標準から見て、図書館と呼べないものが多く含まれているということである。

実際、デリー等の大都市の中央図書館は、充実したウェブサイトや OPAC (Online Public Access Catalog: ウェブサイトで提供される図書館蔵書検索システム) が公開されている。しかし、分館になると電話番号程度しか出ていない。ただウェブサイトに情報が載ることは、分館といえども比較的整備された図書館であると推察される。

東北大学のインド人留学生の話では「英単語で“Library”という言葉は知っていたが、本物を見たのは大学に入学してから初めてだった」ということであった。彼は、インド工科大学 (IIT: Indian Institute of Technology 詳細は後述、以下 IIT) の卒業生であるが、インド最高峰の知的レベルを持つ大学の卒業生ですら、育った街に充実した図書館を持たないことが推測できる。それゆえ公共図書館の普及は、日本と比較して大きく遅れていることが分かる。

図書館の遅れを改善するために、インド文化省の国家的プロジェクトであるヴァーチャル・ライブラリー計画²がある。これはインターネット環境を通して、様々な分野・言語の図書を閲覧できるようにする計画である。しかし筆者がこの計画を知った 2012 年から現在に至るまで、未だに実現はされていないようだ。

2. アジア協会図書館 (The Asiatic Society of Mumbai, State Central Library)



<写真2 アジア協会図書館 (ムンバイ)
(提供: Trishit Banerjee 氏) >

大都市にある充実した図書館の事例として、ムンバイにあるアジア協会図書館を紹介する。この図書館は、1804 年に開館され、ドーリア様式の玄関で有名な州立の中央図書館である。蔵書数は約 25 万冊、うち図書は約 10 万冊である。14 世紀にダンテによって書かれた『神曲』に代表される貴重書 (約 1 万 5 千冊) を所蔵している。英語の蔵書が大部分であるものの、サンスクリット語や現代インド諸語をはじめ、ギリシャ語、ラテン語、イタリア語、ドイツ

語、フランス語といった様々な言語の蔵書を所蔵している。所蔵図書の分野は、インド学の伝統的分野をはじめ、オリエント学、そして伝記、系譜学、政治学、経済学、科学、経営学、旅行記や小説という多岐にわたっている。



＜写真 3、4 アジア協会図書館の宗教書籍コーナー（提供：Trishit Banerjee 氏）＞

この図書館における宗教書籍は、書棚にある図書を見る限り、宗派を問わず多彩な蔵書が所蔵されている。具体的には理論書やヒンドゥー教をはじめ、キリスト教、仏教、ジャイナ教の図書が配架され、宗教ごとに整理されている。公共図書館では、様々な宗教に関連する書籍が、万遍なく所蔵されている。一方、全体的に古い本が多く、カバーが壊れている本もあり、蔵書更新とメンテナンスに力をかけているとは感じられない。

3. 西ベンガル州ラージャー・ラーム・モーハン図書館（Raja Rammohun Library）とその管轄下の図書館

ここでは、西ベンガル州にあるラージャー・ラーム・モーハン図書館とその管轄下の図書館における利用者の志向について紹介する。Chatterjee（2012-2013）³⁾によれば、2011年の5月から8月にかけて、利用者に貸し出された図書の分野は、小説が最も多く989冊である。次に、ベンガル語の児童書（225冊）、伝記（126冊）となり、宗教書籍は8番目で34冊の貸し出ししかなかった。

一方、誰が一番図書館を利用しているかに関する統計では、ラージャー・ラーム・モーハン図書館の管轄下にある24の図書館のうち8館で、最も多い利用者は学生である。学生たちは主に図書館で教科書を利用する。次に、7つの図書館で、専業主婦の利用者が最も多くなる。専業主婦は、図書館で小説や児童書を最も多く借りている利用者である。5つの図書館で、定年退職者の利用者が最も多くなっている。定年退職者は、宗教書籍を借りる傾向が見られる。

以上のデータから、宗教書籍の利用は高齢層が多く、大多数の利用者は宗教書籍に関心がないことが分かる。

Ⅲ. 科学技術研究教育機関の図書館

1. 高等教育と重点研究機関

インドの高等教育は、イギリス統治の影響を大きく残し University と College から

なる。インドの University を代表するものには、デリー大学 (University of Delhi)、ジャワハルラール・ネルー大学 (Jawaharlal Nehru University)、マドラス大学 (University of Madras)、カルカッタ大学 (University of Calcutta)、ムンバイ大学 (University of Mumbai)、プネー大学 (University of Pune) などがある。これらの大学は、人文社会科学から自然科学まで、幅広い学部がある総合大学である。

しかし、世界的に注目されているインドの高等教育機関は、上記の University ではなく、国家の威信をかけて力を傾注している重点研究機関 (Institute) の方である。これらの重点研究機関は、研究だけではなく教育も行うことから、重点研究大学のようなものと考えて良い。Institute は、4~5 年が修業年限となっている。

2. インド工科大学デリー校中央図書館 (IIT Delhi Central Library)

Institute の中でも代表的なものが、IIT である。IIT は、インドを IT 大国にたらしめる人材を輩出する名門研究大学である。初代首相ネルーの肝いりで、1950 年代から設置されていく。1961 年、工科大学法 (The Indian Institutes of Technology Act) が定まり、体系的な整備が始まった。現在、全国に 23 校が展開している。2012 年の事例では、約 50 万人の受験者に対し約 1 万人しか合格しないという、競争率が高い機関である。



<写真 5 IIT Delhi (筆者撮影)>

この IIT の中で、首都にあるデリー校の図書館を紹介する。中央図書館の蔵書数は約 21 万冊、製本雑誌は約 10 万 5 千冊、契約雑誌数は約 580 種ある。資料は、英語で書かれた理工系分野のものばかりである。宗教書籍については、一部の理論研究書を除き所蔵していない。インド諸語で書かれたものは所蔵されていない。

3. インド科学大学院大学 JRD タタ記念図書館

(IISc: Indian Institute of Science, Bengaluru, JRD TATA Memorial Library)

カルナータカ州バンガロールに位置する 1909 年創立のインド科学大学院大学（以下 IISc）は、IIT と並ぶインド屈指の理工系研究大学である

。IIT よりも歴史は古く、学生数約 3 千 2 百名で、ほとんどが大学院生である。

JRD タタ記念図書館は、蔵書数約 19 万冊、受入雑誌数約 750 種、製本雑誌約 22 万冊を所蔵している。所蔵資料は、英語で書かれた科学技術系ものに限られている。



<写真 6 JRD TATA Memorial Library
(筆者撮影) >



<写真 7 Francis Jayakant 博士 (左)
(筆者撮影) >

この図書館のライブラリアンであり、次節で紹介する機関リポジトリのインドでのパイオニアの一人である、Francis Jayakanth 博士によると、インドの高等教育機関の図書館のライブラリアンは、自分の専攻（主に理工系）の学位と図書館情報学の学位の 2 つを持っていないと採用されない。片方しかない場合は、アシスタント・ライブラリアンの地位に留まるといふ。高い理工系の学歴を持つ人材をライブラリアンに就任させることで、科学技術文献の流通拠点を充実させようとする姿勢が垣間見られる。

4. 電子資料と機関リポジトリ

(1) 電子ジャーナル、データベース

インドでは、90 年代の世界的な外国雑誌価格の高騰と慢性的な財政難のため、学術情報の契約は深刻な危機に陥った。そのような環境下で、インドは、数々のコンソーシアム⁴を立ち上げた。

松井（2004）⁵によると、インドは、ナショナルサイトライセンス⁶的な対抗策、つまり各コンソーシアムへの国庫補助金の投入や、そのコンソーシアムの地道な交渉努力に

より、電子ジャーナルの廉価契約に成功した。

インドの物価は日本と比較すると約 8 分の 1 であり、大学予算もそのようなスケールで運営されているため、日本と同規模の電子ジャーナル価格（2014 年度で 2 千 7 百 67 兆円）は到底支払うことができない。そのような背景で全国的な高等教育機関連合による価格交渉は必要不可欠である。そのためコンソーシアムの樹立は自然なことと言える。ナショナルサイトライセンスという、国が電子リソースを契約する手法は、学術機関ごとに契約を任されている我が国の現状とは、違った特色があるものである。

(2) 機関リポジトリ⁷

機関リポジトリとは、大学等の研究成果物（主に論文）をウェブサイト上で公開するシステムのことである。日本の多くの大学でも、この機関リポジトリによる学術成果物の公開が、着々と進んでいる。

インドの機関リポジトリは 2002 年に初めて公開され、日本（2003 年千葉大学）よりも発足が早かった。しかし、その後資金不足や支持者集めが進まず、それほど発展しなかった。しかし近年、機関リポジトリによる学術情報の無償アクセスは雑誌価格高騰への対抗手段として有効であることが、徐々に浸透してきた。

5. 宗教書籍の扱い

本節で紹介した高等教育機関は、専門が科学技術ということもあり、図書館には宗教書籍が一部の宗教理論書を除いて所蔵されておらず、英語で書かれた理学・工学専門書の所蔵に特化されている。ここから分かるのは、名門高等教育機関では、宗教書籍は重視されておらず、理工系の知識・技術の習得に役立つ書籍の集積に大きな力を割いていることである。

College や人文科学関係の学部を持つ University の図書館では、宗教書籍も存在するであろう。しかし、山下（2016）⁸によれば「一般的に理工系学生のほうが優秀で、歴史や文学などに進む者は平均して偏差値で見劣りする場合が多い。」という。インド全土の選りすぐりの秀才が集まる国家重点機関の図書館は、学生が学ぶ理工学系の書籍を充実させることが優先され、宗教書籍を置く必然性がないのである。

このことから、国が力を入れる科学技術系高等教育機関の図書館の中で、宗教書籍は非常にマイナーな存在であり、所蔵されないことすらあることが推察される。

IV. サークレッド・ハート・テオロジカル・カレッジ、オットー・ホッフェンミュラー図書館 (SHTC: Sacred Heart Theological College, Otto Hopfenmueller Library)⁹

1. 宗教組織が母体となって運営される大学図書館

一方、宗教書籍ばかりを所蔵する図書館もある。ここで紹介する、宗教組織が運営する宗教者養成を目的にした単科大学図書館は、蔵書の多くが宗教書籍である。キリスト教の組織が母体となるサークレッド・ハート・テオロジカル・カレッジ（以下 SHTC）は、オットー・ホッフェンミュラー図書館（以下 OHL）という附属図書館を持つ。OHL は、宗教書籍の比率が非常に高い図書館である。

2. 宗教組織が母体となる図書館の特徴

インドは宗教多元的な環境にある。しかし、宗教組織が母体となる教育機関の運営では、キリスト教が群を抜いて大きく力を入れている。キリスト教は、インド全体で 2.3% の少数派であるが、教育と医療の分野での貢献が非常に大きい。キリスト教の存在を抜きに、インドの知性を語ることはできないと言っても過言ではない¹⁰。

キリスト教の教育は、不特定多数の人に「知」を開放する形で教育を広めるという特徴がある。多くの場合、キリスト教の教育機関には図書室や図書館が併設され、在校生が知識や教養を深めることができる。キリスト教の「知」を広める方法は、他の宗教団体とは一線を画す。

インドでは、キリスト教以外の宗教の多くは、一部の事例を除き、宗教書を寺院や僧院など文庫に保存し、閉鎖的な存在に留めている。さらに、こうした文庫は限られた人しかアクセスできない。近代的な「知」を広める装置としての「図書館」の観点から言えば、閉鎖的な寺院や僧院が運営する文庫（図書館）を取り上げることは難しい。

以上の理由で、本稿では、宗教図書の収蔵が多く、図書情報が公開されているキリスト教大学の附属図書館である OHL を紹介する。

3. SHTC について

カトリック男子修道会であるサレシオ会が運営する SHTC は、インド北東部メガラヤ州シロンにある。サレシオ会は、19 世紀中ごろ、北イタリア出身のドン・ボスコ司祭 (Giovanni Melchiorre Bosco, 1815-1888) により設立された。サレシオ会は、ローマに本部を置き、イエズス会に次ぐ会員数を誇る世界的規模の修道会である。SHTC は、サレシオ会を母体として 1938 年に開学した。北東インドにある地理的条件を活かして、

その地域のキリスト教の布教や聖職者養成に力を注いでいる。1981年、SHTCは、ローマ教皇庁立サレシオ大学から、学士の学位授与機関として認定され、1989年には修士の授与機関として認められた。

4. OHL について

OHLは、1890年代に北東インド地域へ伝道を行ったドイツ人神父の名を記念して名付けられ、1980年に開館した。キリスト教関連図書を中心に、約11万7千冊以上所蔵し、約1万3千冊の製本雑誌を所蔵する。電子媒体は、電子ブックが3万5千冊以上、3万記事以上の閲覧が可能である。また神学関連の雑誌を130種、その他のものを70種契約している。そのほか学位論文をはじめ、グーテンベルク聖書やバチカン写本の複製本、初のカシ語¹¹辞書に代表される貴重書、教会文書などのマイクロフィルム、マイクロフィッシュ資料が所蔵されている。



<写真 8 Otto Hopfenmueller Library の書棚
(提供: 岡光信子 氏) >

5. OHL の蔵書構成

OHLの蔵書の内訳は、①聖書学 ②キリスト教神学 ③神学総論 ④聖人伝 ⑤カトリックとその他の宗派 ⑥三位一体説 ⑦キリスト論 ⑧マリア論 ⑨秘跡論 ⑩教会建築論 ⑪終末論 ⑫教会文書学 ⑬キリスト教弁証法 ⑭キリスト教倫理学 ⑮靈魂論 ⑯伝道論 ⑰教会法 ⑱礼拝論 ⑲教父学 ⑳教会史 ㉑比較神学 ㉒キリスト教文学史 ㉓キリスト教言語学、である。

特に力を入れて蔵書構築が行われている分野が、カトリック学、キリスト教人道主義、キリスト教国家、キリスト教的教育学である。また、母体であるサレシオ会関連の資料にも力を入れている。

以上の内訳を見ると、OHLの蔵書は、キリスト教の観点で細かく分類されて保存、管理されていることが分かる。OHLは宗教書籍の蔵書に偏っており、公共図書館や科学技術研究教育機関の図書館とは全く異なる。

キリスト教以外にも、蔵書数が少ないが、インド学、特にシロンが位置する北東インド関連図書やガンディー関連図書、教育学や心理学、社会学や人類学の蔵書がある。

6. 図書館員

OHLのスタッフにも特色が見られる。この図書館の図書館長に当たる Chief Librarian の Abraham 助祭は、母体であるサレシオ会の会員で、教皇庁立グレゴリアン大学の修士号を持ち、SHTCの聖書学の講師を務めている。科学技術研究機関の図書館では、物理や化学といった科学技術分野と図書館情報学の学位を持つ人物が Librarian であったが、ここでは聖書学を専門とする研究者が図書館運営の長を務める。



<写真9 Abraham M. Antony 助祭
(提供：岡光信子 氏) >

7. OHLの運営と利用条件

OHLの予算は大変厳しく、ほとんどが運営費と資料購入費に消えてしまうそうである。そのためバーコードによる電算化管理は行われておらず、ウェブサイトやOPACの公開も行われていない。

この図書館を利用することができるのは、このSHTCに所属する学生、教職員であり、他大学所属の研究者、学生にも開かれている。ただし、他大学の者は紹介状が無ければ利用することができない。また、利用者は全て学士以上の学位を持つことが、必須条件になっている。

OHLは、監視カメラや図書の盗難防止設備がなく、図書の盗難や破損リスクが高いことから、利用者の条件を厳格にしている。しかし、利用資格を満たせば誰でも利用できる開かれた図書館である。館内には有料であるがコピーサービスもある。また、館長のアブラハム助祭自らが、時間が許す限り、利用者に対してキリスト教学の研究に関する助言や提言も行っている。

V. おわりに

本稿で取り上げたインドの3種類の図書館における、宗教書籍の取り扱いは以下のようである。

インド公共図書館において、宗教書籍は、特定の宗派に偏らず集められているものの、予算等の関係から維持管理にそれほど重点が置かれていない。また、公共図書館の利用者の多くは、定年退職者層を除いて、宗教書に関心が無い。

科学技術研究教育機関の図書館は、宗教書籍が非常に少なく、科学技術文献に特化されるという特徴を持っている。インド国家が最も力を入れている教育機関では、図書館に宗教書を置くという発想がないのである。

一方、宗教組織が母体となって運営される大学の図書館は、蔵書の中心が宗教書籍である。また、独自の観点で非常に細かく分類され、キリスト教専門の知識を持つ者が管理運営を行っている。

インドの社会では、人々の生活の中で宗教実践は非常に盛んである。日常の中で、宗教は生きている。しかし、宗教団体が母体となる特殊な図書館を除き、ここで取り上げた公共図書館と科学技術研究教育機関の図書館を見る限り、図書館では宗教を前面に打ち出すことはない。インドでは、図書館の宗教書籍の数や貸し出し件数を見る限り、「実践する生きた宗教」と「教養・知識としての宗教」との間には大きな隔たりが見られるのである。

【謝辞】

本稿をまとめるに当たり Abraham M. Antony 助祭、Francis Jayakanth 博士、Trishit Banerjee 氏の三名に大変お世話になりました。岡光信子氏には、情報提供、情報源の紹介を含め様々な観点からご協力頂きました。この場で御礼申し上げます。

I express special thanks to Br.Abraham M. Antony, SDB of SHTC, Otto Hopfenmueller Library, Dr. Francis Jayakanth of IISc, JRD TATA Memorial Library, Mr.Trishit Banerjee of Tohoku University and Dr. Nobuko Okamitsu of Tohoku University for valuable information and their supports.

(2017年4月3日)

¹ 外務省「インド (India) 基礎データ」

<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/india/data.html> (2017/3/4 閲覧)。

² National Mission on Libraries, Ministry of Culture, Government of India, *National Virtual Library of India*,

<http://www.nmlindia.nic.in/pages/display/38-national-virtual-library-of-india-> (nvli) (2016/3/4 閲覧)。

なお当計画を、拙稿「E-1399 インドのヴァーチャル図書館：公共図書館充実化への挑戦」『カレントアウェアネス-E』232、2013年2月21日。

<http://current.ndl.go.jp/e1399> (2017/3/4 閲覧) にて紹介した。

³ Partha Chatterjee, *Report on public library: reading habits and socio – cultural change a study of West Bengal, Assam, Tripura and Mizoram Public Libraries and the role of Raja Ram Mohun Roy Library Foundation*, 2012–2013, pp.216-217.

⁴ インドの主要なコンソーシアムには以下のようなものがある。

- INDEST-AICTE Consortium
- UGC-Infonet Digital Library Consortium

・ NKRC (National Knowledge Resource Consortium)

・ DELNET

⁵ 松井祐次郎「インドにおけるナショナルサイトライセンスの実践—国家的プロジェクト INDEST コンソーシアム—」『カレントアウェアネス』CA-1516、No.279、2004年、pp.4-5。 <http://current.ndl.go.jp/ca1516> (2017/3/4 閲覧)。

⁶ 国が一括して電子ジャーナルを契約する方式である。日本では未だ実現しておらず、各大学の個別の契約が中心である。

⁷ インドで代表的な機関リポジトリには、以下のようなものがある。インドの論文を探す際には、活用して欲しい。

・ NISCAIR Online Periodicals Repository

・ ePrints@IISc

・ Shodhganga

・ CASSIR (機関リポジトリ横断検索システム)

⁸ 山下博司『インド人の「力」』講談社、2016年、p.38。

⁹ 当箇所は、岡光信子「図書館の魅力とマネジメント」『たいまつ通信』82、2015年、p.5。ほか、Abraham M. Antony 助祭から頂いた情報及び *Oxford Encyclopaedia of South Asian Christianity*, v.II L-Z, Oxford University Press, 2012, p.601 を元にした。

¹⁰ 山下博司・岡光信子『新版 インドを知る事典』、東京堂出版、2016年、p.63。

¹¹ カン族の言語であり、メガラヤ州の公用語である。

執筆者紹介 吉植 庄栄（よしうえ しょうえい）

東北大学附属図書館 情報サービス課 参考調査係長

1972 年生まれ。東北大学大学院教育学研究科博士課程前期修了。教育哲学（東洋教育思想）専攻。現職をはじめ東京外国語大学、宮城教育大学の図書館での勤務経験がある。現在は図書館勤務の傍らインドの図書館学者である S.R.ランガナタンを研究し、教育の一形態である図書館の本質を突きとめようとしている。

